



福部村埋蔵文化財調査報告書第11集

TOTTORIKEN IWAMIGUN FUKUBESON
鳥取県岩美郡福部村

KURAMI KOHUN GUN
蔵見古墳群発掘調査報告書

(蔵見2・3号墳)



1997

福部村教育委員会

序 文

福部村は、狭い面積ながらも原始・古代の人々が力強く生活を営んだ痕跡が数多く残されており、近年の発掘調査から数多くの貴重な資料が報告されています。これらの報告では、県下でも数少ない縄文時代の遺跡が3ヶ所確認されており、この時代から本村一帯が衣食住に恵まれた定住しやすい環境にあった事を窺わせています。

特に昭和62年から3年間の継続調査が行われた「栗谷遺跡」の発掘調査では、膨大な縄文土器などの出土遺物とともに縄文時代の加工技術の高さを窺わせる木製杓子が発見され、多くの出土品と共に重要文化財に指定されています。

この調査を契機に村内に所在する遺跡の重要性が再認識され、遺跡の保護と資料館の設置により沢山の人々にご覧いただく機会ができたことを感謝しています。

今回行った蔵見古墳群の発掘調査では、本村では数少ない横穴式石室の古墳でしたが、築造方法、特異な埋葬形態等がわずかながらも解明されたことは、近年頻繁に行われている開発から埋蔵文化財を保護するための基礎となり意義深いものを感じています。

終わりに、今回の発掘調査事業を実施するにあたり、鳥取県教育委員会をはじめ、関係各位の多大なるご指導、ご援助に対し深甚なる感謝を捧げるとともに、発掘調査事業の地権者と調査に従事していただいた皆様に対し厚く御礼申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

平成9年3月

福部村教育委員会
教育長 老 門 辰 生

福部村教育委員会
老門辰生 謹贈

例 言

1. 本書は、福部村教育委員会が調査主体となり、平成8年度に国・県の補助を受けて蔵見2・3号墳の試掘調査を実施した蔵見古墳群発掘調査報告書である。
2. 発掘調査対象となった古墳は、鳥取県岩美郡福部村大字南田古宮236・237・30・30-3・31に所在する。
3. 本書に使用した挿図の座標・方位は磁北であり、標高は、東京湾平均潮位を基準としている。
4. 本書に掲載した挿図3の「地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5000分の1国土基本図を複製したものである。(承認番号)平5中複第 375号」
5. 本書の執筆は鳥取県教育委員会の指導のもとに谷岡陽一と中原斉が執筆編集を行い、倉敷考古館館長の間壁忠彦氏には「蔵見の陶棺について」執筆していただいた。
6. 出土遺物・図面・写真等の整理は、鳥取県埋蔵文化財センターの指導により調査員と作業員が行った。
7. 出土遺物、実測図等は福部村教育委員会で保管している。
8. 出土遺物には、〔例：KM2-3（蔵見2号墳一遺物番号3）〕をネーミングしている。
9. 発掘調査及び本報告書の刊行に際し、現地での調査指導及び石材の同定を行っていただいた鳥取大学教育学部教授の赤木三郎氏をはじめの方々からご指導、ご援助をいただいた。銘記して感謝申し上げます。

間壁忠彦（倉敷考古館館長）

中村浩（大谷女子大学教授）

亀田修一（岡山理科大学助教授）

亀井照人（鳥取県教育文化財団）

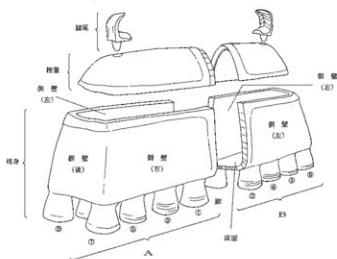
久保穰二郎（鳥取県埋蔵文化財センター）

中原斉（鳥取県教育委員会事務局）

野田久男（鳥取北中学校教頭）

安養寺誠（土地所有者）

（株）京都工芸（陶棺復元受託社）



陶棺模式図及び各部名称

目 次

序 文	
例 言	
本 文 目 次	
挿 図 目 次	
表 目 次	
図 版 目 次	
第I章 調査に至る経緯	1
第1節 調査の経緯	1
第2章 調査の経過	1
第II章 蔵見古墳群の位置と環境	3
第1節 蔵見古墳群の位置と自然的環境	3
第2節 蔵見古墳群の歴史的環境	4
第III章 蔵見古墳群	7
第1節 蔵見古墳群の概要	7
第2節 蔵見2・3号墳の概要	11
第IV章 発掘調査の概要	12
第1節 蔵見2号墳	19
第2節 蔵見3号墳	26
第V章 出土遺物	34
第1節 蔵見2号墳の遺物	34
第2節 蔵見2号墳の陶棺	36
第3節 蔵見3号墳の遺物	38
第4節 蔵見3号墳の陶棺	42
第5節 後世の遺物	45
第VI章 蔵見古墳群発掘調査の成果	51
第VII章 付論「蔵見の陶棺」について	54
報告書抄録	57
図 版 編	

挿 図 目 次

挿図1	福部村位置図……………	3	挿図14	蔵見3号墳墳丘平面図……………	27
挿図2	福部村内遺跡分布図……………	5	挿図15	蔵見3号墳石室実測図……………	31・32
挿図3	蔵見・南田地区遺跡詳細分布図……………	7	挿図16	蔵見2号墳出土土器(須恵器・土師器)……………	35
挿図4	調査区全体図及びトレンチ配置図……………	9・10	挿図17	蔵見2号墳出土鉄器……………	36
挿図5	第1トレンチ土層断面図(北壁面)……………	12	挿図18	蔵見2号墳出土陶棺実測図……………	37
挿図6	第2トレンチ土層断面図(西壁面)……………	12	挿図19	蔵見3号墳出土土器(須恵器①)……………	39
挿図7	第3トレンチ土層断面図及び第3・9トレンチ遺構図……………	13・14	挿図20	蔵見3号墳出土土器(須恵器②)……………	40
挿図8	第4トレンチ土層断面図及び平面図……………	15	挿図21	蔵見3号墳出土鳥形瓶……………	41
挿図9	第8トレンチ土層断面図及び遺構図……………	16	挿図22	蔵見3号墳出土銅製品……………	42
挿図10	第5トレンチ土層断面図及び第5・6・7トレンチ平面図……………	17・18	挿図23	蔵見3号墳出土陶棺及び鴟尾実測図……………	43・44
挿図11	蔵見2号墳墳丘平面図……………	20	挿図24	蔵見2・3号墳出土土器(瓦器・土師質土器)……………	45
挿図12	蔵見2号墳石室実測図……………	23・24	挿図25	五反途古墳出土の鴟尾……………	55
挿図13	蔵見2号墳遺物出土状況……………	25	挿図26	五反途陶棺推定復元図……………	56

挿 表 目 次

挿表1	蔵見・南田地区遺跡一覧表……………	8	挿表4	蔵見2・3号墳出土土器観察表(3)……………	48
挿表2	蔵見2・3号墳出土土器観察表(1)……………	46	挿表5	蔵見2・3号墳出土土器観察表(4)……………	49
挿表3	蔵見2・3号墳出土土器観察表(2)……………	47	挿表6	蔵見2・3号墳出土金属製品観察表……………	50

図 版 目 次

図版1	蔵見古墳群周辺の空中写真
図版2	①蔵見2・3号墳遠景 ②調査前の蔵見2・3号墳
図版3	①蔵見2・3号墳 ②蔵見2・3号墳 ③前庭部が崩壊した蔵見2号墳 ④墳丘背後の地山整形 2号墳
図版4	①調査前の全景 ②第1トレンチで検出された掘り方 ③第2トレンチで検出された周溝と土層堆積状況 ④玄室東側壁の裏込め状況
図版5	①第3トレンチで検出された東外護列石 ②第3トレンチで検出された東外護列石 ③第3トレンチで検出された東外護列石 ④第3トレンチで検出された東外護列石
図版6	①玄室内奥壁部 ②玄室内玄関部 ③玄室内遺物出土状況 ④玄室内遺物出土状況

3号墳

- 図版7 ①調査前の全景 ②調査後の全景 ③2号墳西周溝断面検出状況 ④第3トレンチで検出された掘り方
- 図版8 ①第4トレンチで検出された周溝と上層堆積状況 ②第5トレンチで検出された周溝と土層堆積状況 ③第8トレンチで検出された周溝と周溝屈折部の列石 ④玄室西側壁の裏込め状況
- 図版9 ①第3トレンチで検出された西外護列石 ②第3トレンチで検出された西外護列石 ③第3トレンチで検出された外護列石 ④第3トレンチで検出された左外護列石
- 図版10 ①東外護列石全景 ②石室全景と東外護列石
- 図版11 ①東外護列石検出状況 ②東外護列石検出状況 ③東外護列石検出状況 ④東外護列石検出状況
- 図版12 ①石室内部 ②西側壁内部 ③玄室内遺物出土状況 ④前庭部に散布していた陶棺片
- 図版13 蔵見2号墳出土遺物 (1~14)
- 図版14 蔵見2号墳出土遺物 (15~24)
- 図版15 蔵見2号墳出土遺物 (32)
- 図版16 蔵見3号墳出土遺物 (33~46)
- 図版17 蔵見3号墳出土遺物 (47~60)
- 図版18 蔵見3号墳出土遺物 (61~72)
- 図版19 蔵見3号墳出土遺物 (73~83)
- 図版20 蔵見3号墳出土遺物 (84)
- 図版21 蔵見3号墳出土遺物 (86)
- 図版22 蔵見3号墳出土遺物 (86)
- 図版23 蔵見2・3号墳出土遺物 (25~31・85・87~90)

第I章 調査に至る経緯

第1節 調査の経緯

今回の調査対象となった「蔵見2号墳・蔵見3号墳」は、鳥取県岩美郡福部村大字南田字古宮236・237・30・30-3・31に所在し、1976（昭和51）年の遺跡分布調査で確認された蔵見古墳群内の2基である。古墳の登録に際しては、大字内の古墳を1つの古墳群としてまとめることが慣例化されており、当古墳は現地踏査時に位置的関係から隣接する大字蔵見地内と誤認されて蔵見古墳群に編入されている。周囲の地形環境からみても本来は南田古墳群に編入されるべき古墳であるが、すでに多方面の文献等へ蔵見古墳群として紹介されており、錯綜を避けるため本報告でも蔵見古墳群として扱うことにする。

この2基の古墳が発見された当時の景観は、鳥取県特産の「梨園」が急傾斜面に開かれており、園内のほぼ中央付近に所在していた。両古墳は、横穴式石室で石室相互の間隔は10m前後と極端に近接しており、墳丘の封土は流失していたことから、露頭した石組は南方の南田バス停付近でも遠望することが可能であった。

現在この古墳が位置する小渓谷は、梨園が放棄され、孟宗竹と雑木が繁茂する荒地地に変貌し、露頭していた石室を容易に確認できない程に変貌していた。

当古墳で最も問題となったのは、発見の当初より指摘されていたことであるが、2号墳、3号墳ともに開口した横穴式石室の羨道部と前庭部の周辺に陶棺片をはじめとする多量の遺物が散乱し、貴重な資料の散逸が憂慮されたこと。露出した石室の崩壊が極端に進行していることであった。

そこで福部村教育委員会では、1991（平成3年）に、この石室周辺に散乱した貴重な資料を散逸から守るために、可能な限りの表面採集を行ない保管することとした。遺物は、玄門部から前庭部の周辺に最も多く散布しており、その散布状況から2号墳の遺物と3号墳遺物が明確に区別できる範囲に集中していた。この表面採取の結果、多量の陶棺と片須恵器の坏蓋、坏身、高坏、平瓶、長頸壺、鳥形瓶、裝飾須恵器の了杯・子壺（壺・長頸壺）などの完形に近い多くの遺物が採集された。

この採集された遺物は、古墳の発見時にサンプル的に採集されていた物と合わせて整理が行われ、3号墳より採集された多数の陶棺片は、復元可能な陶棺であることが判明した。更に整理の過程で陶棺の一部とは概念的に考えられない特徴のある破片が確認され、その特徴と形態から陶棺に付く小型鳩尾である可能性が考えられた。鳩尾の付く陶棺の存在は従来より指摘されていたが、鳩尾と陶棺本体が現存する例はなく、1992（平成4）年～1994（平成6）年の3年にわたり、倉敷考古館の間塚忠彦館長のご指導をいただき、鳩尾付陶棺の復元が行われた。一方、このように貴重な資料が埋蔵されていた石室の崩壊は徐々に進行しており、福部村教育委員会では古墳の保護について鳥取県教育委員会と協議を重ねた。その結果、1996（平成8年度）に国及び県の補助を受けて試掘調査を実施し、蔵見2・3号墳の現況と規模及び築造年代等を確認し、将来の崩壊対策に備えることになった。

第2節 調査の経過

調査は、平成8年10月17日に蔵見古墳群発掘調査委員会を開催し、調査の方法、工程等について協議を行った。現地の状況は、孟宗竹、矢竹等の雑木等が繁茂していた伐採前の予想に反し、墓域の広がりが認められ、

古墳の規模を確認するため、当初予定していた5ヶ所のトレンチと2・3号墳の石室内調査の面積250㎡に4ヶ所のトレンチ追加し、調査対象面積を500㎡に拡大して調査を行うこととなった。

調査の目的は、露頭した石室を中心に放射状のトレンチを設定し、周溝等を検出することにより築造時の古墳の規模、平面プランを確認する事であった。しかし、両古墳ともに前庭部側に著しい崩壊が認められ、前庭部側についてはトレンチの設定を断念し、玄室部の両側面と石室背面の3方にトレンチを設定した。

調査の過程で2号墳と3号墳の間に設定した第3トレンチから両古墳の外護列石が検出され、3号墳の右側面の第5トレンチでも3号墳の右墳端部を示す外護列石を検出した。古墳の墳端部を示す外護列石は、2号墳の場合、石室の中心軸に対しほぼ平行しており、方墳であることが推察可能であったが、第3・5トレンチで検出された3号墳の外護列石は、石室に対し特異な台形状に開く列石が認められた。墳丘の形状を確認するため、第5トレンチで確認されている外護列石をボーリング林によって貫入追跡調査を行なった。その結果、多角形墳である可能性が強まり、貫入調査で応答反応を示した部位に沿って、新たに4ヶ所のトレンチを設定し、外護列石の形状を追求することとなった。

現地での発掘調査は、平成8年6月17日から着手し、翌年の2月10日で現地調査を完了し、2月28日で室内整理作業を完了した。

註1 間壁忠彦・間壁霞子「鶴尾付と推定される小陶棺」『倉敷の歴史（倉敷市史研究紀要）』5、1995

調 査 日 誌 (抄)

6月17日	蔵見古墳群発掘調査開始	11月29日	2号墳の外護列石から延びる石列を検出
11月8日	調査対象面積を500㎡に拡張する	12月12日	外護列石のコーナーを検出
11月20日	調査予定地の地形測量開始	12月24日	2号墳の石室内床面で長頸壺を検出
11月25日	試掘調査トレンチの設定	2月3日	2号墳の石室内床面で鉄刀を検出
11月26日	試掘調査トレンチ掘り下げ開始	2月5日	2号墳の石室内床面で坏蓋・坏身10点検出
11月26日	第3トレンチで2・3号墳外護列石を検出	2月10日	現地調査完了

発 掘 調 査 の 組 織

敬称略

調査団長	老門 辰生	福部村教育委員会教育長						
調査委員	田村 義朗	福部村文化財保護委員長						
	河本 康二	福部村文化財保護委員						
	黒田 一郎	福部村文化財保護委員						
	小谷 博文	福部村文化財保護委員						
	森原 増美	福部村文化財保護委員						
	横山 利	福部村文化財保護委員						
調査指導	鳥取県教育委員会							
調査主任	谷岡 陽一	福部村教育委員会社会教育係長						
調査員	中村 和範	福部村教育委員会主事						
作業員	安養寺徳美	井手野玉江	宇山 光徳	河本 康二	岸 守	黒田 一郎		
	田村 義朗	坪内 由枝	鳥羽 努	村上登喜枝				

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と自然環境

福部村は鳥取県の東部で、東経134度17分、北緯35度32分に位置している。北は風光明麗な日本海に面し、東は日本海に突出した独立峰のような驪馳山山頂から南に延びる立岩山山系の分水界で岩美町に接している。西は国の天然記念物に指定されている鳥取砂丘から多鯨ガ池を経て摩尼山山系の分水界で鳥取市に接し、更に南東の稲葉山に至り、稜線を縦貫する村道宇倍野線で国府町に接している。

この東西南の三方を各山系に囲まれた内陸は、日本海沿岸に発達した砂丘が福部の湾口を閉ざし、沖積平野となっており、東西約9km、南北約10km、総面積34.94km²で、日本海に開けたV字形を呈する小盆地を形成している。

福部村内には、鳥取県の縄文遺跡を代表する「栗谷遺跡」・「直浪遺跡」をはじめ、15遺跡と175基の古墳が周知の遺跡として確認されており、その大半は1976（昭和51）年に鳥取県教育委員会と福部村教育委員会によって行われた遺跡分布調査と1993～1995（平成5・6年度）年の福部村教育委員会による「村内遺跡発掘調査事業」を契機に遺跡台帳が整備され、突発的な開発行為等によって発見された遺跡がその都度追加登録されている。

これらの遺跡、古墳群は、日本海沿岸に発達した鳥取砂丘の内陸部に形成されたラグーンの名残である湿地帯に面する微高地と、主要河川に面する丘陵上に細密的な集中分布を示している。

砂丘活動の起源は約3万年といわれ、日本海から吹き寄せる偏西風によって形成された広大で不毛の地といわれた砂丘地は、大正の中頃から「らっきょう」の栽培が盛んに行われている。近年では、畑地かん水設備の導入により全国有数の生産高を誇っている。この砂丘の形成によって閉ざされた後背地は、ラグーンの名残で古くは江戸時代から干拓が行われた「湯山田圃」・「細川田圃」、通称（沢）と呼ばれる湿地帯に水稲耕作が行われているが、降雨量100mm程度に達すると1m前後の海拔に位置するこの湿地帯は、水中に没し、潟湖のような光景をしばしば目にすることがある。

河川は、鳥取市、岩美町、国府町との境を接する「上野山」（標高390m）を主峰に分水界となって本流の塩見川を形成し、摩尼山山系の山麓を水源とする箭溪川、同じく摩尼山山系山麓の水源と湯山池周辺の湧水を水源とする江川の3河川が主要河川で2級河川に指定されている。この3河川は、前述の沢と呼ばれる細川の湿地部で合流し、鳥取砂丘の東端を蛇行して驪馳山裾の河口へ流出している。

気候的には、比較的温暖で過ごしやすいが、年間降水量は1970mm前後で、山陽方面と比較するとかなり多く、冬季には平野部で50cm前後の積雪を見ることがある。

歳見古墳群が位置する当地は、岩美町との境を接する標高347mの二上山山系から南方へ派生する尾根が幾重にも突出



挿図1. 福部村位置図

し、この尾根の先端部に沿って蔵見集落の家々が東西に細長く軒を連ねている。

蔵見1・2号墳は、この蔵見集落と県道福部停車場線の中間地点で、舌状に突きでた尾根先端部付近の南斜面に位置している。古墳から眼下を俯瞰すると田園風景の向に南限の植物とされているクリハラソなどの貴重な植物の宝庫として保護されている標高約80mの南田神社の社叢が独立峰のような風情を見せている。

この南田神社の社叢から庵見川に沿って下ること約2kmには、立岩山山系の山裾に栗谷の集落が位置し、このあたりで福部平野が大きく開けて行き、栗谷集落の下流約100mには、近年の発掘調査により縄文時代後期を主体とする多種多様な出土遺物が出土した栗谷遺跡(3)が所在している。対面する南方約200mの通称「蔵の山」と呼ばれている丘陵尾根の先端部一帯は、本村で最も密度の高い60基の古墳が確認されている地域で、「^前矢古墳群」の中核となっている。

舌状に突出した栗谷遺跡の丘陵に沿って北へ約500m進むと、小浜谷の山麓に鳥取県指定の天然記念物の「^{坂谷}神社社叢」が広がっている。このうっそうと緑色に染まった社叢林は、高木層にスダジイの巨木をはじめ、ヤマツバキ・カゴノキ、垂高木層にモチノキ・サカキ・シロダモ、低木層にゴンズイ・ヌルデ・コショウノキ、草本類にホシダ・オニヤブソテツ・イワタケソウ・クリハラソなどが代表される植物で、南限・北限として知られる多種類の植物が混生し、県内でも例の少ない照葉樹林帯となっている。

このあたりで日本海沿岸の東西に細長く延びる国立公園鳥取砂丘の一部に包括される福部砂丘がそれと確認でき、砂丘南端の後背地に直浪遺跡(2)が位置している。遺跡の中心部と推定されているこの付近は、緩斜面の微高地を削平して低段丘上に果樹と蔬菜が栽培されている。

遺跡の前面に当たる南方は、満々と水をたたえた旧湯山池が広がっていたが、江戸時代から徐々に行われた干拓により、現在は水田に変貌している。対岸の摩尼山山系から幾重にも延びる丘陵先端部には、数多くの古墳が存在し、県東部の湖山池、県中部の東郷池のように、湖畔に突き出た丘陵上に多くの古墳群が築造されている形態と共通点が多く見られる。

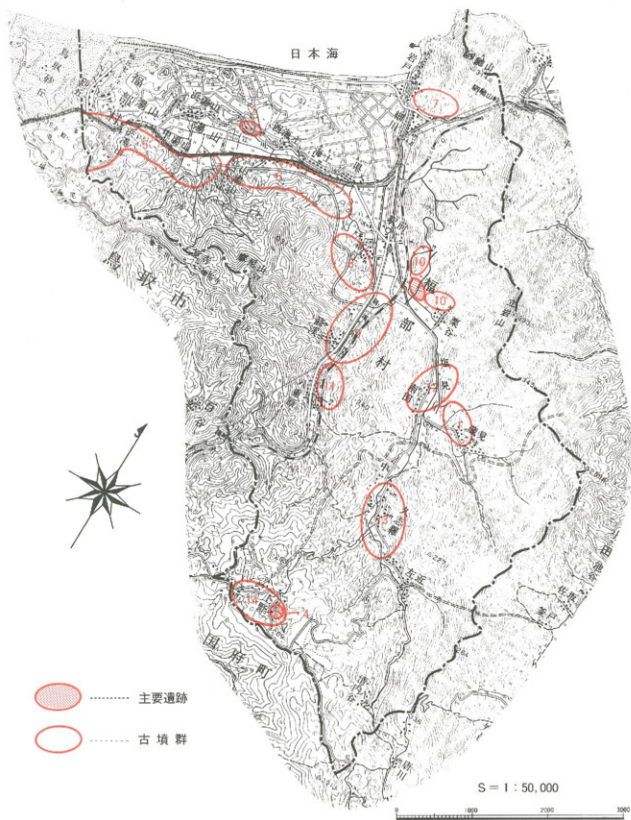
この福部の地に、人の生活が営まれ始めたと推定される縄文時代前期は、いわゆる縄文海進によって現在の平野のほとんどが日本海に没する入り海若しくは、鳥根県の宍道湖のように海水と淡水が交じり合う汽水湖と推定され、人々はこの入り江を見下ろす低丘陵を拠点として、海の幸、山の幸を追い求めて自給自足の生活を送っていたと考えられる。直浪遺跡と前述の栗谷遺跡は、約3kmの対岸に位置し、双方の遺跡とも縄文時代・弥生時代・古墳時代と長期にわたり、同じ場所での生活が営まれていることから、舟による海上交流も考慮すべきであり、食糧などの恵が豊富で環境的にも永住しやすい地域であったと推定される。

註1 福部村教育委員会『福部村内遺跡発掘調査報告書』1995

註2 福部村『福部村誌』1941

第2節 蔵見古墳群の歴史的環境

福部村内では、旧石器時代の遺跡・遺物は発見されていないが、鳥取県東部に分布する縄文時代の遺跡では、早期の押型土器が出土している鹿野町の柄杓目遺跡に次いで、栗谷遺跡(3)が前期まで遡る遺跡として確認されている。栗谷遺跡の発掘調査では、ドングリ・クルミ、トチの実などを貯蔵した37基の貯蔵穴群と土器・石器の他、木器・網代編みの籠・もじり編みの綱などが低湿地遺跡特有の良好な遺存状態で検出され、これら多種多様な出土遺物は、縄文時代の生活様式を知る上で貴重な資料として平成6年に61点が国の「重要文化財」に指定されている。



挿図2. 福部村内遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|------------|-----------|
| 1. 蔵見古墳群 | 2. 直浪遺跡 | 3. 栗谷遺跡 | 4. 上野遺跡 | 5. 湯山古墳群 |
| 6. 海土古墳群 | 7. 細川古墳群 | 8. 高江古墳群 | 9. 箭溪古墳群 | 10. 栗谷古墳群 |
| 11. 八重原古墳群 | 12. 南田古墳群 | 13. 久志羅古墳群 | 14. 上野山古墳群 | |

村内には、この粟谷遺跡、直浪遺跡が縄文時代の代表的な遺跡として知られ、福部砂丘に境を接する鳥取市の浜坂砂丘地の中で「浜坂遺後遺跡」・「長者ヶ庭遺跡」・「栃木山遺跡」が縄文時代の遺物散布地として知られている。この他湖山池の南岸に所在する「布勢遺跡」では、土器・石器・木器などが多量に検出され、南西岸に所在する「柱見遺跡」では、平成5年の発掘調査において縄文時代後期の丸木舟が出土し、現存するものとしては、国内最大級のものと思われる。

このように、現在までに因幡地方で発見されている縄文時代の主な遺跡は湖岸又は、海岸部のような水辺に近い場所に多く分布している。

弥生時代になると稲作が普及し、各石器の他に金属器の使用が始まり、隣接する岩美町新井の丘陵部で流水文銅鐸が出土し、浜坂砂丘や湖山砂丘では、銅鐸・鉄鎌が発見されている。

縄文時代に人々が定住した粟谷・直浪の両遺跡でも弥生時代の人々が継続して生活していたことが土器・石器などから明らかとなっており、塩見川の源流である上野山台地（標高250m）では、畑地の開墾時に弥生時代中期の土器・扁平片刃石斧などが採取され、「上野遺跡」（4）の存在が確認されている。上野遺跡は、粟谷遺跡、直浪遺跡とは異なった山間地に位置することから、高地性集落遺跡との関連も注目すべき点である。この後古墳時代へ移行すると、共同体の支配者であった首長の死にあたって、壮大な高塚を築き多くの副葬品と共に手厚く死者を埋葬する風習が広まり、因幡地方にも畿内的な様相をおびた大型の古墳が築造されている。例えば、鳥取市の六部山3号墳・吉部家1号墳・柳間1号墳などが代表的な前方後円墳である。

村内でも古くから数多く古墳の分布が確認されており、約175基の古墳が湯山古墳群をはじめ11群にまとめられ、その分布は福部村内各地に点在している。墳丘の形態は前方後円墳・方墳・円墳・横穴と多岐に渡るが、その大半はラグーンを見下ろす丘陵の尾根に分布しており、後期古墳に見られる横穴式石室は、平野部よりやや奥まった山間部に位置する特徴を示している。

村内における古墳の発掘調査は、そのほとんどが開発に伴う調査である。特筆されるものとしては、直浪遺跡の南対岸の小丘陵上に位置する「湯山6号墳」で、小札を柵の葉状に装飾した特異な「小札鉄眉眉庇付冑」と「三角板革緩短甲」、鉄刀（3本）、鉄鎌（12本）の武器がセットで副葬されていた例が上げられる。

遺跡の発掘調査例では、昭和51年に直浪遺跡の中心部と思われていた地点から、西へ約50mの丘陵台地で採砂作業中の工事関係者によって「柱穴群」が発見された。福部村教育委員会による発掘調査の結果、5世紀から6世紀に渡り継続的に居住したと推定される竪穴式住居跡（1棟）・掘立柱状建築遺構（3棟）を検出している。尚、この遺構は、調査終了後埋戻しが行なわれ、現在も保存されている。

古代に律令制が確立された時期には、福部村一帯は、因幡国法美郡服部郷に属しており、海士と八重原には、式内社があった。隣町の岩美町では国の史跡指定となっている白鳳期の岩井庵寺塔跡も遺存し、上野山を越した国府町中郷には因幡の国府が置かれていた。以後この国府町一帯が政治・経済・文化交流の中心地として繁栄して行き、奈良時代の官立寺院である金光明天王護国寺（国分僧寺）、法華戒罪寺（国分尼寺）が建立されている。

木村には、この時代を特徴付ける出土品は極めて少ないが、箭浜の墓地で墓穴を掘り下げ中に土師質の「経筒」が出土している。この経筒は、上部がやや広がった高さ24cmの円筒形を呈し、蓋の中心部はキューピー人形の頭のような突起状の特徴あるつまみを有しており、現在は鳥取県立博物館に保管されている。

註1. 福部村教育委員会『粟谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1989・1990

註2. 福部村教育委員会『湯山6号墳発掘調査報告書』1978

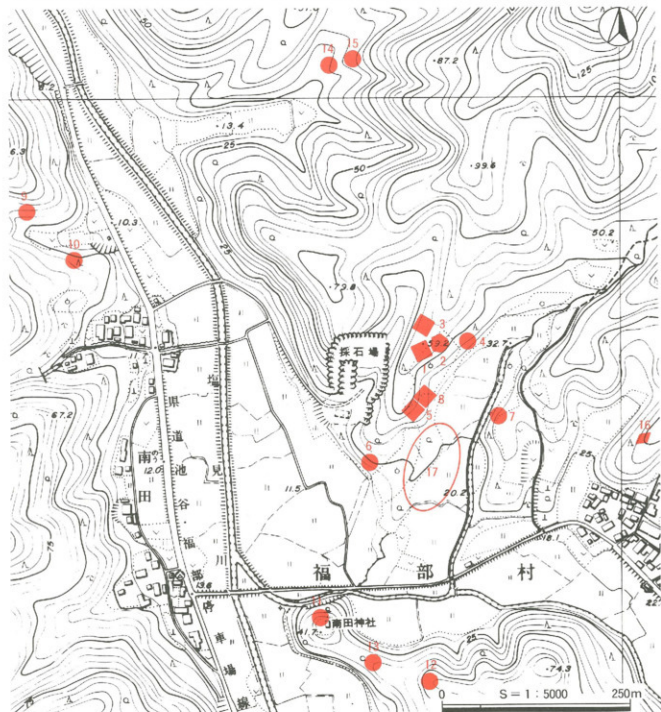
註3. 福部村教育委員会『直浪遺跡発掘調査報告書』1976

註4. 鳥取県埋蔵文化財センター『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ4, 1989

第三章 蔵見古墳群

第1節 蔵見古墳群の概要

今回の調査対象となった蔵見古墳群は、岩美町との境を接する標高347mの二上山山系から南方へ舌状に派生した尾根の先端部付近に分布している。蔵見2・3号墳が立地する丘陵部の尾根とその南に分かれて延びる支丘陵の尾根上には、一辺が11m~17mの方墳が確認されており、蔵見1号墳をはじめとする総数8基からなる蔵見古墳群が展開している。しかし、古墳群の構成は前述のとおり大字境を基本に一群として捉え



挿図3. 蔵見・南田地区遺跡詳細分布図

分布区 番号	遺 跡 名	所 在 地	種 類 (墳 形)	規 模 (m)	遺 物	備 考
1	蔵見2号墳	大字南田古宮	古墳 (方墳)	別記	別記	今回の調査対象古墳
2	蔵見3号墳	大字南田古宮	古墳 (多角形墳)	別記	別記	今回の調査対象古墳
3	蔵見1号墳	大字南田古宮	古墳 (方墳)	径17.0・高2.0		
4	蔵見4号墳	大字南田古宮	古墳 (不明)	不明	主体部露出	
5	蔵見5号墳	大字南田古宮	古墳 (方墳)	径11.0・高1.2		
6	蔵見6号墳	大字南田古宮	古墳 (不明)	不明	平瓶片	横穴式石室
7	蔵見7号墳	大字蔵見	古墳 (不明)	主体部のみ残存 (2.2×1.1)		主体部露出
8	蔵見8号墳	大字南田古宮	古墳 (方墳)	径20.0・高1.8		はり石
9	南田1号墳	大字南田	古墳 (不明)	不明		横穴式石室
10	南田2号墳	大字南田	古墳 (円墳)	径10.0・高1.5		
11	南田3号墳	大字南田	古墳 (円墳)	径10.0・高1.5		
12	南田5号墳	大字南田	古墳 (円墳)	径17.0・高1.6		
13	南田6号墳	大字南田	古墳 (円墳)	径12.0・高1.1		
14	南田7号墳	大字南田字奥小蔵見	古墳 (不明)	不明		横穴式石室
15	南田8号墳	大字南田字奥小蔵見	古墳 (不明)	不明		横穴式石室
16	蔵見1号墓	大字蔵見字乳母ヶ谷家ノ奥	中世墓		燹棺	平成5年度試掘調査
17	蔵見遺跡	大字蔵見字高ノ坂	遺物散布地	不明		

挿表1. 蔵見・南田地区遺跡一覧表

ているため8基の構成となっているが、分布状況と付近一帯の立地環境等から本来は、蔵見古墳群と南田古墳群は一連の古墳群形成と考えられる。従って、以下の報告では両古墳群を併せた総数15基で形成される古墳群の展開として考察を行うことにする。

当古墳群は、昭和51年と平成6年に行われた遺跡分布調査で周知の遺跡として確認されているものと、今回の調査中に周辺の踏査で、1基の方墳と1基の露頭した横穴式石室を新たに発見し、追加登録を行った。しかし、更に細密的な分布調査を実施すれば、新たに発見の可能性を秘めている地域と考えられる。

古墳群は、福部平野の湿田地帯からJR山陰本線の鉄道を沿り、2級河川の塩見川に沿った上流約2kmの中山間地に位置している。東の二上山山系から派生する丘陵と、西の蔵の山から派生する丘陵が迫り、南北に細長く開けた谷合に水稲が耕作され、東の山裾に蔵見集落、西山裾に南田集落の家々が建ち並んでいる。

古墳群は、この両側の丘陵先端部に集中的に分布し、過去に発掘調査例が無いため当古墳群の築造時期、形態等は不明である。墳丘の封土が流失したことにより後期古墳の特徴を示す横穴式石室を有する古墳が6基確認されており、村内では横穴式石室が最も集中している古墳群である。これらの古墳群に埋葬されている被葬者の居住地としては、蔵見2・3号墳が位置する低丘陵の南東に隣接する「蔵見遺跡」の可能性が高く考

えられるが、未調査であり遺跡の時代、性格等が確認されていないため今後の調査研究が待たれるところである。

第2節 蔵見2・3号墳の概要

今回の調査対象となった蔵見2・3号墳の立地する低丘陵は、丘陵先端部で分歧して挿鉢状の小谷地形を呈し、西方に向かって緩斜面の谷底部となっている。両古墳は、このやや奥まった南向傾斜面の中腹を選地として造営されており、谷底部から仰視することにより、一層の迫力効果を狙ったものと推定される。2号墳は傾斜面中腹の西方に築造されており、3号墳は谷奥部の東方に築造されている。石室の基底部は2号墳が3号墳より約0.5m高いが、日測ではほぼ同レベルと感じられ、相互の間隔は約8mと近接しており、南方に開口して並ぶ横穴式石室が埋葬施設である。

両古墳の背後は、傾斜面の自然地形を更に鋭角的に削り込み、地山整形を行うことで墳丘を築造する基面を確保している。東方向の3号墳背後の斜面に進むにつれて緩斜面の自然地形となり、石室の構築に伴う巨石の搬入ルートでもあったと考えられる。現在は開墾時と思われる削平によりテラス状の平坦面となっており、著しい封上の削平により現存する天井石が浮かび上がった様相を呈している。玄室の側壁部から谷底部にかけては急傾斜面となって下降し、両古墳ともに明確な羨道部は把握できない状況となっている。

発見された当初の状況は、典型的な後期古墳の特徴を示す横穴式石室玄室の天井石に熔結凝灰岩の大型石材3枚を用いた「中高式天井」と確認できる状況であった。『中高式天井は、奥壁側の天井石と羨道部側の天井石の間に隙間を設けて側壁を積み上げ、2枚の天井石に架けて更に高く1石を置く特異な天井構造であり、旧因幡国（鳥取県東部）に特徴的に分布する石室の構造である^{註1}。』しかし、現在は大きく崩壊が進行しており、天井石は2号墳が2石、3号墳が1石を残して丘陵下に転落し、遺存しているいずれの天井石も不安定な状態となっている。

2号墳の石室内部には、残存する玄門部の付近に多量土砂が流入し、奥壁に向かって少量の堆積が認められた。玄室の内部は左側壁が転落し、更に天井石の中高部分がこれを押さえ込むように乗り、半壊状態を露呈しており、崩壊の進行が憂慮される。

3号墳の石室内部には、土砂の流入が若干認められ、奥壁付近の土砂に混じって肥料袋等の廃材が見られたことから石室内部を果樹園の資材小屋に転用していたと思われる。

蔵見2・3号墳が注目されたのは、前述の古墳発見時と遺物の採集において出土例の無い鳥尾付陶棺と出土例の少ない鳥形瓶等の特異な遺物が発見されたことにある。しかし、蔵見2・3号墳の存在は意外に古くから知られており、『考古界』第1編第4号（1901）では石室内部の計測、陶棺片が出土して発掘した様子が記述されている。又、『因幡二國に於ける古墳の調査』（1924）には、「宇古宮の石室はよく原形を遺存して、入口南東に向ひ椽形に近き平面を有して長さ十二尺、幅奥端にて四尺九寸あり、天井石は三個より成り、前後の二石の上に中央の石材を重ねて一種の持送り天井をなす。此の塚明治三十年の頃発掘して陶質器を出せりと伝ふ。』この記述内容から蔵見3号墳である可能性が高く、明治30年頃に発掘が行われ、器形・個体数等は不明であるが、須恵器が出土していることが記述されており、遺物が搬出された可能性が高い。また、石室内部の縮密な観察と計測に加えて、中高式天井を持つ横穴式石室の略測図が記述されており、おそらく2号墳もかなり良好な遺存状態を保っていたと考えられる。

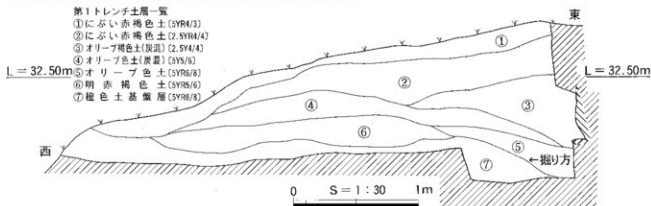
このように約100年前には原形に近い状態で遺存し、注目されていた古墳であるが、一部の地元住民以外からはその存在も忘れ去られ、昭和51年に新発見遺跡として登録されたことになる。

註1. 下高藏哉「鳥取県東部における中高式天井石室に関する一考察」『鳥取考古学会誌』第6集1989

第IV章 発掘調査の概要

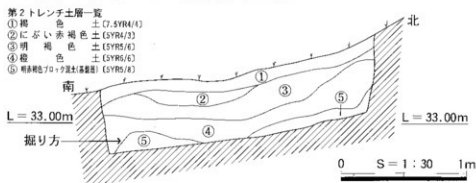
調査は、両古墳とも現地表面では削平によって確認できない古墳の墳端部を検出するため、露出した石室を中心に両側面と後背面にトレンチを設定し、古墳の規模を確認するため次のようなトレンチの設定を行った。第1トレンチは、2号墳の玄室部左側壁面から1m×4mの東西トレンチを設定した。第2トレンチは、2号墳の玄室奥壁背面から1m×2.3mの南北トレンチを設定した。第3トレンチは、2号墳の玄室部右側壁面から3号墳の玄室部左側壁面まで達する1m×8.5mの東西トレンチを設定した。第4トレンチは、3号墳の玄室奥壁背面から1m×5mの南北トレンチを設定した。第5トレンチは、3号墳の玄室部右側壁面から1m×6mの東西トレンチを設定した。なお、両古墳ともに前庭部側は極端な削平と崩壊が認められ、トレンチの設定を断念した。

この各トレンチを掘り下げた結果、第1トレンチでは2号墳石室左側壁の掘り方を確認することができたが、玄室部の側壁面から填土が流失しており、古墳の墳端部を特定することはできなかった。第2トレンチでは、2号墳石室奥壁の掘り方④と周溝⑤が確認された。



挿図5. 第1トレンチ土層断面図(北壁面)

第3トレンチでは、2号墳の石室右側壁に著しい崩壊が認められ、更に進行する恐れがあったため、掘り方確認の掘り下げはできなかったが、両古墳の填土の規模を示す外護列石を

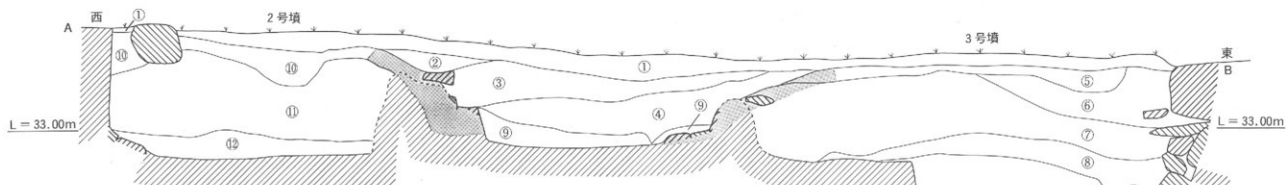


挿図6. 第2トレンチ土層断面図(西壁面)

検出した。周溝は3号墳築造時の周溝面に取り込まれており確認はできなかった。また、同トレンチでは、3号墳石室左側壁の掘り方⑧と外護列石、周溝④が検出された。

第4トレンチでは、3号墳石室奥壁の掘り方⑩と周溝④⑤が確認された。

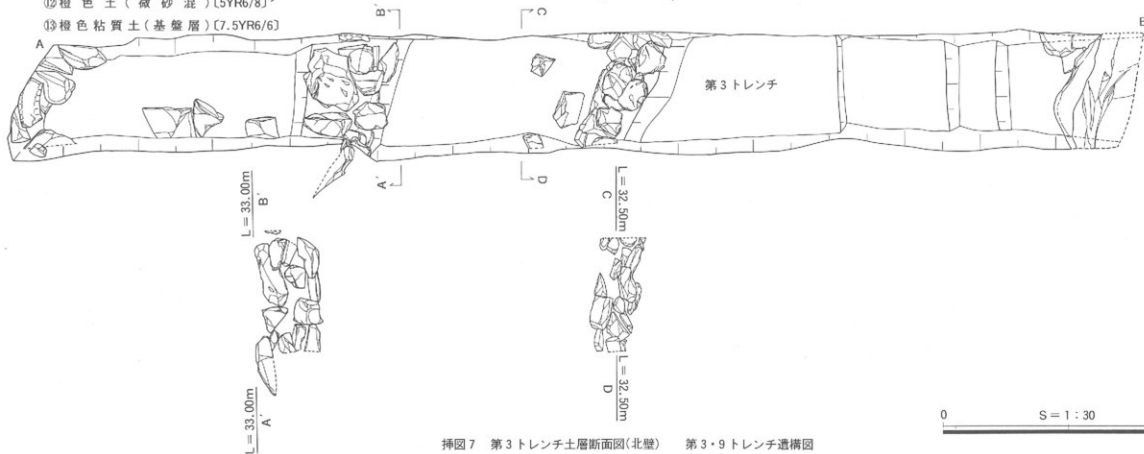
第5トレンチでは、3号墳の石室右側壁に崩壊が認められ、更に進行する恐れがあったため、掘り方確認の掘り下げはできなかったが、外護列石と周溝が検出された。第3トレンチで検出された2号墳の外護列石は、石室の主軸に対して直線的にはほぼ平行しており、第1・2トレンチで検出されなかったため、ポウリン



第3トレンチ土層一覧

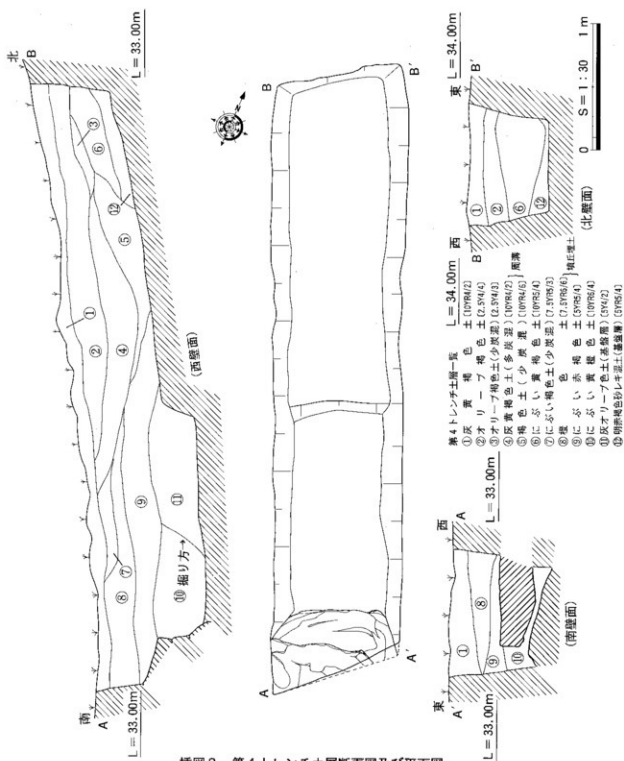
- ① 黒褐色土 [5YR2/2]
 - ② にがい赤褐色土 [5YR4/4]
 - ③ 赤褐色土(微炭混) [5YR4/8]
 - ④ 黒褐色土(多炭混) [5YR2/1]
 - ⑤ 暗赤褐色土 [5YR2/3]
 - ⑥ 明赤褐色土 [2.5YR5/6]
 - ⑦ 明褐色土 [7.5YR5/6]
 - ⑧ オリーブ色土 [5YR5/4]
 - ⑨ 橙色土(微砂混) 基盤層 [5YR6/8]
 - ⑩ 明赤褐色土 [5YR5/6]
 - ⑪ 赤褐色土(レキ混) [5YR4/8]
 - ⑫ 橙色土(微砂混) [5YR6/8]
 - ⑬ 橙色粘質土(基盤層) [7.5YR6/6]
- 3号墳周溝埋土
- 墳丘盛土

(北壁土層断面図)



挿図7 第3トレンチ土層断面図(北壁) 第3・9トレンチ構造図

0 S = 1 : 30 2 m



挿図8. 第4トレンチ土層断面図及び平面図

グ棒による貫入追跡調査を行った結果、玄室奥壁面の東墳裾部を起点として、玄門部東墳裾部の崩壊した斜面に露頭している人頭大の石へと連なる反応を示していた。3号墳の外護列石は、第3トレンチと第5トレンチで検出されたが、石室の主軸に対しほぼ平行する2号墳の外護列石とは異なり、双方の外護列石ともに石室の主軸に対して平面台形状に狭まる様相を見せていた。しかし、第4トレンチでは検出されなかったため、貫入追跡調査を行ったところ、第3トレンチで検出している外護列石は、玄室奥壁部の側面を起点として構築が始まり、石室の主軸に対して大きく直線的に外反し、崩壊している斜面上に露頭した人頭大の一石に続く反応を示していた。第5トレンチで検出されている外護列石は、玄室奥壁部の側面を起点として構築

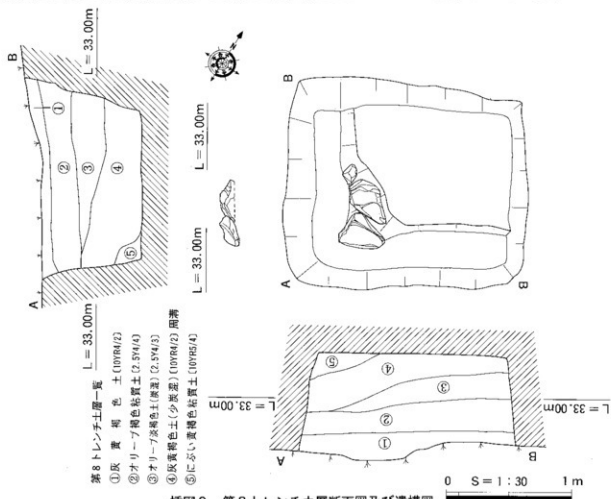
が始まり、石室の主軸に対して直線的に大きく外反し、玄室中央付近ではほぼ平行し、玄門部付近で鋭角的に内反し、前庭部付近で途切れる反応を示していた。また、第4トレンチで検出された周溝と、第5トレンチで検出している外護列石の延長上の交点付近でも外護列石の一部と思われる反応が認められた。

この貫入追跡調査反応では、一般的な古墳の墳形とは異なった反応を示しており、列石の形状等を確認する目的で、貫入追跡調査反応に沿って第6～第9トレンチを新たに追加設定して列石の上面までの掘り下げを行なった。

第6トレンチは、第5トレンチの外護列石検出面の前庭部側に1m×6mの「J」状トレンチを設定した。

第7トレンチは、外護列石の起点部を確認するため第5トレンチの外護列石検出面から起点部に向けて0.6m×1.2mの長方形トレンチを設定した。

第8トレンチは、第4トレンチで検出された周溝と、第5トレンチで検出している外護列石を結ぶ延長上の交点付近で行なった貫入調査反応から、新たに追加設定した2m×1.7mの方形トレンチである。

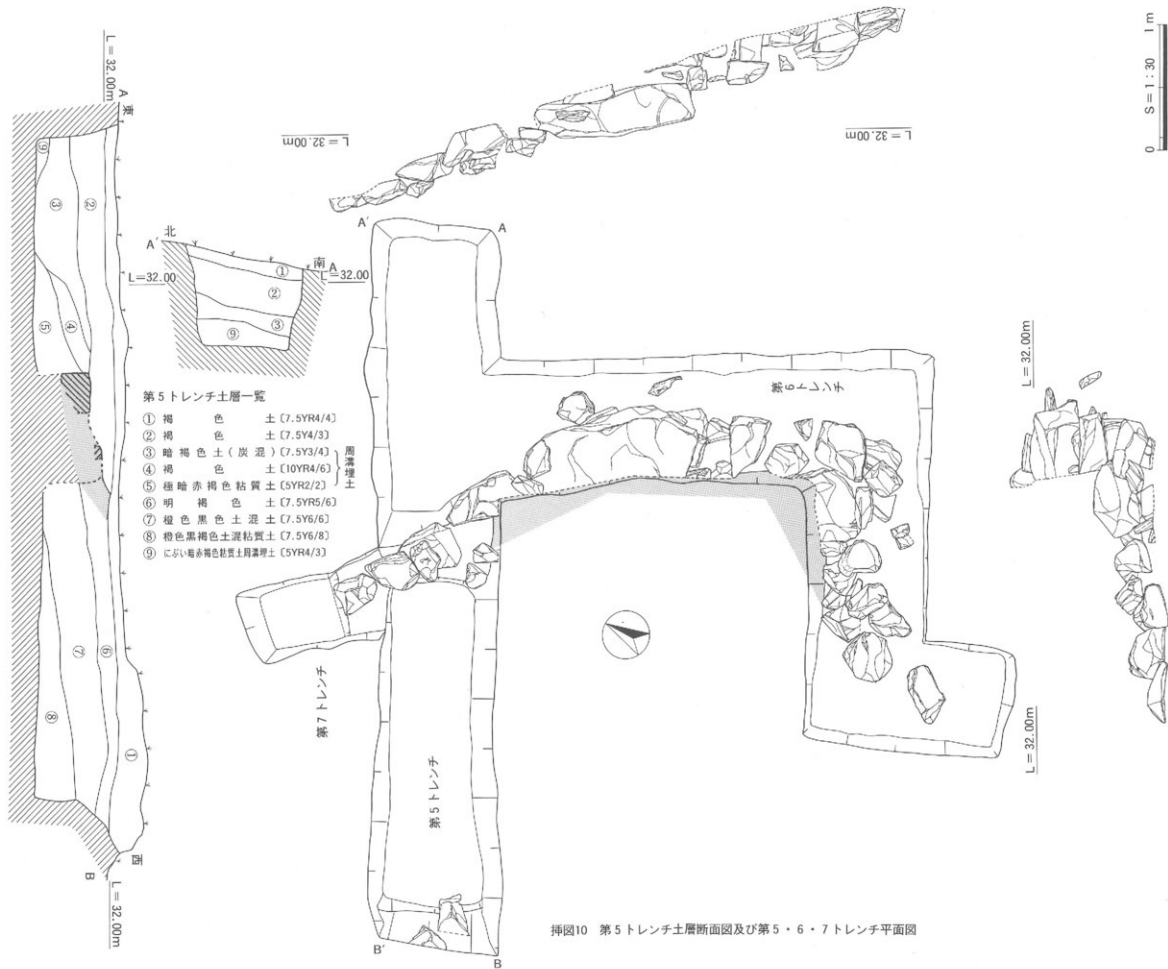


第9トレンチは、第3トレンチで検出している外護列石の起点部付近に0.8m×1.2mの長方形トレンチを設定した。

この追加トレンチより、3号墳を巡る周溝と、比較的良好な遺存状態で検出された玄室右墳裾部の外護列石を一体的に観察することが可能となった。

石室内部の調査は流入土を掘り下げることにより、床面の検出と築造過程の検証を行った。

この調査経過と調査結果を2号墳から順次考察を加えて次のとおり説明する。



第1節 葦見2号墳

1. 墳 丘

地山整形

本墳は、前述のとおり急傾斜面の中腹に立地しており、地山整形は背後の傾斜した自然地形を更に鋭角的に削り込むことにより、墳丘の基底面となるテラス状の段地形を造成する事前整地作業が行われている。この地山整形は、橙褐色に露頭した背後の急傾斜面と第2トレンチに見られる地山面にその状況が顕著に表れている。その概要は、テラス状段地形の南側端部を更に階段状に掘り込むことにより玄室部の奥壁掘り方を掘り込み、側壁部では掘鉢状に掘り下げた底面を鋭角的に掘り込んで石室の基底面としている。

墳 丘 (挿図11 図版2～5)

墳丘の構築方法については、前庭部側が崩壊しているため玄室部の側面から奥壁背後の限定された範囲での考察となった。墳丘の盛土は前述の地山整形によるテラス状の段地形の南端部を更に階段状に掘り下げることにより玄室部の基底面としている。テラス状の段地形面に掘り込んだ周溝面は、前庭部側の自然地形に沿って下り勾配となっており、墳丘の盛土もこの面を基本的な基底面として盛土が施されている。

玄室の左墳丘部の第1トレンチでは、数段階にわたる築造工程が見られた。まず、地山を緩やかな角度で掘り下げて掘り方面とし、掘り方の上面から外方に掘り上げ土を盛土して平坦面を造りだしている。この後下段の石材を据えることにより側壁としているが、この際石材の安定を保つため小石を地山と石材の間に差し込み、続いて石材の上面まで盛土を施している。更に下段の石材上面から外方へ緩いスロープ状に傾斜した盛土を施して、2段目の石材搬入面を確保している。次に2段目の石材を側壁として積み重ねているが、ここでも石材を安定させるために下段と2段目の石材の間に小石の埋込みが見られた。続いてこの石材上面から下降する傾斜面の裏込め石が施されている。3段目の石材は、1・2段目の石材と比較して軽量であることと、石室背後の段地形面から搬入できるため、特に石材の搬入面は設けていない。3段目の石材を積み重ねた後、盛土によって石材を支えており、特に裏込め石は認められなかった。

このように石材の積み重ねに伴い裏込め石と盛土を段階をおって交互に行っており、盛土の大半は前述の地山整形による廃土を利用したと思われる。

玄室の東墳丘部に設定した第3トレンチでは、下段の側壁石材上面までの掘り下げを行ったが、側壁の崩壊する危険性があり、更に掘り下げて調査を進めることはできなかった。このトレンチでは墳裾部にあたる外護列石の背面より石室の主軸に直交して内方へ直線的に伸びる人頭大の石列が検出されたが、この石列の用途等は不明である。また、墳丘の構築方法については第1トレンチとほぼ同様の構築過程が認められたが、2段目の石材を据え付け後、この石材の上面から外護列石の頂部面まで一気に盛土を施している。

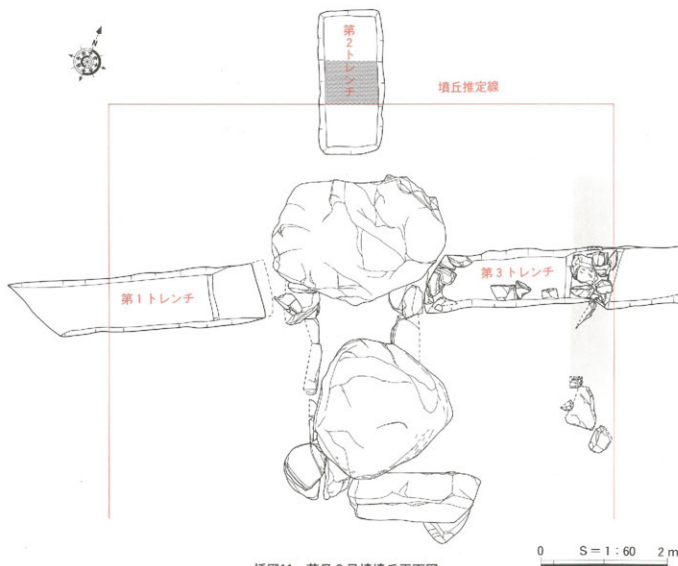
奥壁背後の第2トレンチは、遺存する天井石が不安定で崩落の危険性があり、奥壁背面を掘り下げて観察するトレンチは設定できなかった。したがって可能な限り近接したトレンチを設定したが、奥壁背面の裏込め状況を確認することはできなかった。このトレンチでは、粗雑な地山整形を行った後奥壁の石材を据え、周溝内面の下端部から奥壁の石材上面まで盛土を施している。この段階で石室の周囲を固め、上面の盛土と一体化させて第1次墳丘の盛土工程を終了している。次に石室の天井石を架構させることにより、積み重ねた3段の側壁に荷重を加え、更に安定させて第2次墳丘の過程となる天井石の上面を覆う盛土が施されてお

り、この段階で墳丘の外形を整えて周溝面も造られている。

墳丘の形態・規模は、前述のとおり側壁より上面は削平により、遺存する天井石が地表に露頭していることから、墳丘の高さを確認することはできないが、玄室部の東墳裾部を示す外護列石が第3トレンチで検出されており、墳丘は石室の中心軸に対してほぼ直線的に平行して構築されていること。玄室背面の第2トレンチで検出された周溝面が石室の中心軸に対して直交していることから平面的には方墳と考えられる。

南の前庭部側では崩壊により墳丘端部を確認することはできなかったが、北側は第2トレンチで周溝が検出された。

石室の中心軸に対し、第3トレンチで検出している外護列石の端部を西墳裾部に置き換えて墳丘の規模を推定すると、周溝を除く東西の一边は約8mの墳丘と推定される。また、第2トレンチで検出している墳丘裾部と第3トレンチで検出された墳丘裾部にあたる外護列石の頂部はほぼ同じ水準である。周溝の深さは墳丘背面の15cmに対し外護列石の頂部から下端面の深さは50cmで高低差が見られ、墳端部が前庭部側に約9°傾斜した墳丘であると推定される。



挿図11. 蔵見2号墳墳丘平面図

外護列石 (挿図7 図版5)

本墳の外護列石は、東墳裾部の第3トレンチで検出されており、貫入追跡調査では奥壁部の東墳裾部を起

点に構築され、玄門部東墳裾部の崩壊した斜面に露出した石材まで直線的に確認された。墳丘の流失により、第1トレンチでは痕跡も確認できなかったが、西墳裾部にも構築されていた可能性は高い。奥壁背面の墳裾部では、明瞭に周溝面が確認されているが、列石の痕跡は認められなかったことから、築造時当初から外護列石は構築されていないと思われる。

唯一検出されている第3トレンチの外護列石は人頭大から握り拳大の河原石と山石が見られ、主体的には角礫凝灰岩で構成されている。

外護列石の積み重ねは、地山面から3段階にわたる積み重ね工程が認められた。地山面を基底部として墳裾部に約80cmの幅で1段目の石材を並べ、隙間に粘質土を詰めている。2段目は、1段目に外面をほぼ揃えて1段目と同様の工程を繰り返している。3段目は、外面から約20cm内面側に控えて積み重ねており、基底面から頂部までの高さは約50cmを測る。3段目の石材は1段目と比較して一回り大きな石材を積み重ねることで一層の安定性を確保している。この積み重ねられた石材の構築方法には、石材の節理面を周溝面に直交させて小口積みを行なうことにより、周溝内への転落を防ぐ配慮が見られた。

この外護列石の外方に遺存していた周溝は、後に築造された3号墳の周溝面として掘り込まれており、周溝幅、深さ等は不明であるが、外護列石の頂部から基底部の外面が露出して墳丘の流失を防ぐ役目を果たしていたことが土層断面から見てとれる。

2. 石室

占墳は、南向傾斜面のやや奥まった中腹に位置している。石室は等高線にほぼ直交して主軸はN-22°-Wをとり、南方に開口する単室の無袖型横六式石室であり、南西約200mの泉道池谷福部停車場線と基底部の比高差は約16.5mを測る。

3枚の石材で構成される中高式天井は、玄門部左側壁が玄室内に崩落したことにより、玄門部上の1石が転落したことで、わずかに残存する羨道部が閉ざされ、2枚の天井石に架けて更に高い位置に載せられていた1石は、玄門部の上まで移動している。この崩壊により原位置の状態で遺存している天井石は、奥壁部の1石のみである。側壁は、玄室左中央部から玄門部2段目が玄室内に転落している他は、東側壁がやや内面に迫り出し、不安定になっているがほぼ原位置を保っている。平面的には、玄室・羨道部(榎石?)の一部が確認できる程度で、玄門部から前庭部側は崩壊により遺存していない。

遺存する石室の全長は西側壁部で3.9m、東側壁部で3.65mを測る。石室の壁面を構成する巨石は全て近辺で産出されている凝灰岩が用いられており、石室内面の側壁には多くの齧痕が見られることから切石の石室を意識していると考えられる。また、側壁間の隙間を塞ぐ詰め石には玄武岩が充てられており、玄室と羨道部を区画する榎石(玄門)には扁平の角礫凝灰岩が据えられている。

流入土は、奥壁部で約10cm、西玄門部付近で約50cmの堆積が見られ、床面を検出するために掘り下げた結果、須恵質の蓋坏、長頸壺、鉄刀、鉄鏝が検出された。この出土状況は、原位置を保っているものと考えられるが、前述の遺物採集時には羨道部周辺と玄室内の流入土面に多くの遺物が散乱していたことから、これらの遺物は攪乱により搬出されたものである可能性が高い。

石室掘り方

石室の基底面は前述の墳丘端部に比例し、前庭部側に向けてやや下り傾斜となっており、尾根中腹の等高

線に直交して石室の主軸が取られている。石室側面の掘り方は地山を逆台形に掘り込み、深さは約40cmを測る。奥壁の背面では、テラス状の段地形面から約1.4mを鋭角的に削り込んでおり、石材の据付け調整に余裕の少ない掘り方が認められた。掘り方の規模は、玄室部の東西方向で約3.5mと推定される。

玄室 (挿図12 図版6)

玄室長は、西側壁部で3.2m、東側壁部で3.3mを測り、玄室幅は奥壁部で1.6mを測る。玄門部側は、石室左面内の流入土上に転落している側壁が不安定であり、調査の安全を優先して転落石下の流入土を掘り下げることはできなかった。従って、腰石の上面からの推定では玄門部で約1.5mを測る。

玄室の平面形は奥壁部と比較して玄門部がやや狭くなるが、腰石は直線的に据えられていることから、長方形を意識している。

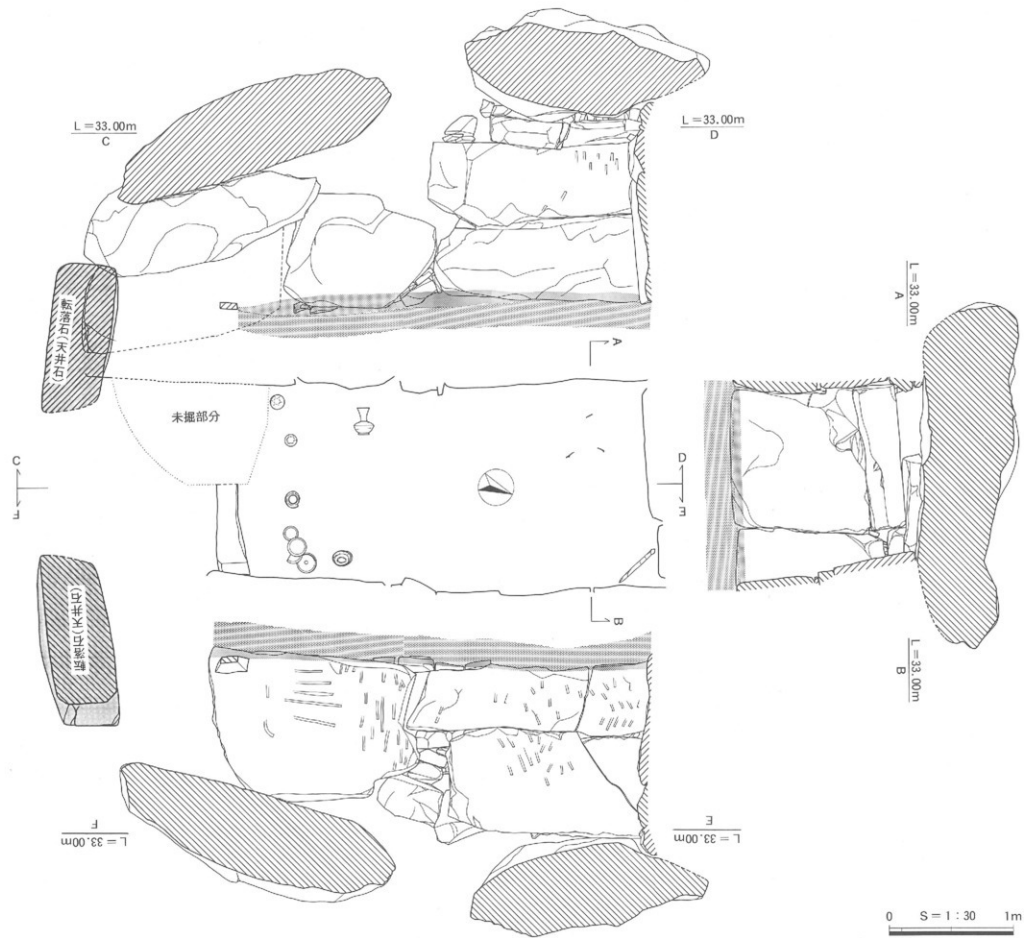
壁面は東側壁が崩壊により内面にやや迫り出しているが、両側壁共に垂直的に立ち上がると考えられる。

奥壁は3段の石材で構成されており、下段は西側が大きな石材で高さ1.1m、幅1.1mの内面が平らな凝灰岩を据え、東側は高さ4.5m、幅1.1mの内面が平らで細長い凝灰岩の2石で構成されている。2段目は角柱を呈する玄武岩を横一文字に積み重ね、3段目は西の石材を失っているが、2段目と比較して小型の同じ石材を同様の工法で積み重ねている。この各石材の隙間を塞ぐ詰め石には握り拳大から人頭大の玄武岩が丁寧に詰め込まれており、3段に積まれた奥壁の高さは1.6mを測る。

西側壁は、下段に内面が平らな3個の凝灰岩を据え、奥壁側では2段目に凝灰岩を積み重ね、更に3段に角柱を呈する玄武岩を横一文字に積み重ねている。玄門側の2石は上面がやや丸味を持つが、奥壁側の下段と2段目は低く、横長で各面を切石状に面が取られ、下段と2段目の接地面を隙間無く積み上げている。3段に積まれた奥壁部の高さは1.4mを測り、各石材の隙間を塞ぐ詰め石には握り拳大から人頭大の玄武岩が丁寧に詰め込まれているが、玄門部側の2段日以降は転落しており詳細は不明である。また、遺存する2段目の側壁には、内面を平らに調整する数条の鑿痕が認められ、何れも上から下へ降ろす打痕である。

西側壁は、奥壁側が2段で玄門部側は高く1石で、全て凝灰岩による構成となっており、奥壁に向かって高さを増す構造となっている。2段に積まれた奥壁側が最も高く1.40mを測り、玄門部側の側壁は上面がやや丸味を持つが、奥壁側の下段と2段目は低く、大きさの比較的揃った横長で各面を切石状に面が取られている。下段と2段目の接地面は隙間無く積み上げているが、天井石の荷重による割裂面が上段から下段目へと走っている。また、石材の設置にあたっては、奥壁側の下段に玄門部側の石材が被さっていることから、奥壁側を据えた後玄門部側を据えていることが判る。各石材の隙間を塞ぐ詰め石には握り拳大から人頭大の玄武岩が丁寧に詰め込まれている。この3石の側壁には表面を平らに調整する多条の鑿痕が認められ、上から下へ降ろす打痕と玄門部側の側壁には、左から右へ横打ちする数条の鑿痕が認められたことから、粗雑ではあるが切り石を意識しているものと考えられる。

床面は、橙褐色の地山を整形した際の残土がほぼ平坦に敷き詰められていたが、棺の置かれていた痕跡は確認できなかった。玄門部側の床面では坯蓋、坯身がまとめて検出され、中央部の西脇で長頸壺、中央部のやや奥壁側の西脇で鉄鏃、奥壁の東隅で鉄刀が検出された。玄門部側の床面で検出された坯蓋、坯身には西の群と東の群では明確に時期差が認められ、東の群に対して西は古相を示している。この2群に分かれる遺物の出土位置と時期差から、2次埋葬が行われた可能性が高く、第1次埋葬では木棺が玄室左面に安置され、木棺が朽ちた後追葬となる第2次埋葬は、玄室東面に陶棺が安置されたと推定される。この時点で陶棺



押図12 藏見2号墳石室実測図

の玄門部側に坏蓋、坏身、西脇に長頸壺、鉄鎌、奥壁側に鉄刀が副葬品として置かれたものと推定される。

羨道

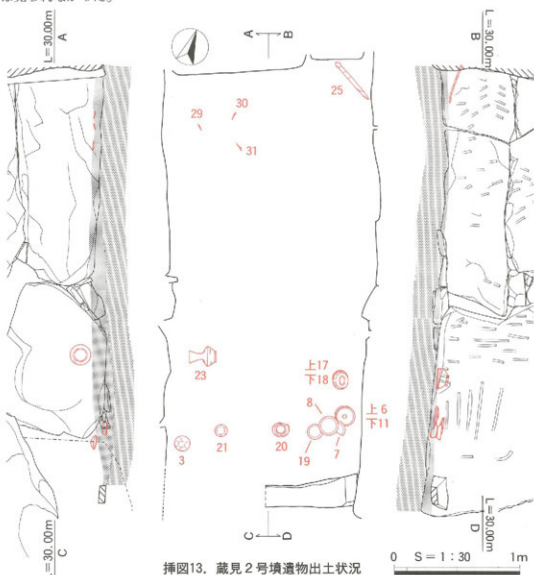
羨道と玄室を区分している框石は扁平で細長い石材を用いて仕切られており、框石の据えられている位置は、東側壁の前庭部側下端面に直交して据えられており、西側壁部では腰石のほぼ中央部の下端面に位置する。従って、側壁を配置する段階では明確に羨道と玄室を区別する腰石の配置は見られない。

羨道部は、前述の崩壊により玄室部に隣接する極僅かな部分が残存しているが、框石の西面は崩壊の危険性により掘り下げが不可能となっている石室左側面の流入土に覆われている。従って石室の西面は推定値とであるが、羨道部幅は玄門部で1.5mを測り、残存する羨道長は西側壁で0.5m、右側壁で0.1mを測る。しかし、前庭部側に更に続く推定される羨道端部までの規模と構築方法、閉塞石の存在等は不明である。

3. 石室内の遺物出土状況 (挿図13 図版6)

今回の調査で石室内から出土した遺物は、土師器1点、須恵器11点、鉄製品4点の計16点と手の平大の陶棺片6点が出土した。陶棺片は多量の流入土に混入して検出されたことから盗掘時のものと思われるが、他の遺物は、全て玄室内に堆積していた流入土下の床面で検出され、出土状況からこの部分については、後世に攪乱を受けた様相は見られなかった。

玄門部側では、土師器の甕1点と須恵器の坏蓋5点、坏身5点が床面で検出された。内、蓋1点と坏身1点は石室の中心軸に対して西面で検出され、坏身(3)は西側壁寄りでは伏せられて検出され、蓋(21)はやや中寄りでは検出された。この蓋と坏身は、石室の中心軸に対して東面で検出された他の須恵器と比較して古相を示しており、第1次埋葬



挿図13. 蔵見2号墳遺物出土状況

に伴う副葬品と推定される。

石室の中心軸に対して東側壁面では、重ねて伏せられた状態の坏身(17・18)が検出された。この坏身から玄門部寄りでは、2枚重ねの坏蓋(6・11)が検出され、これに一部を連鎖的に重ねて並べた上向き状態の坏蓋(7・8)がやや中央で検出した。更に中央ではこの坏蓋の下に一部を重ねた坏身(19)が検出された。少し間隔を置いて石室の中心軸部では坏身(20)が伏せた状態で検出された。土師器の甕(24)は、前述の連鎖的に重ねられた坏蓋と坏身の下から破片状態で検出された。この甕は、器形等から前述の第1次埋葬に関連するものと思われるが、坏蓋4点と坏身4点は第2次以降の埋葬に伴う副葬品と推定される。

玄室中央部の左側壁部では、長頸壺(23)が検出された。口縁部を左側壁に向け、石室の主軸に対して直交した横倒しとなっており、第2次埋葬の副葬品と推定される。

西奥壁部周辺では、腐食の進行した刀子片3点と鉄鏃片(29~31)が3点検出された。床面での検出状況には、一定の方向は見られず、攪乱を受けた様相が見られたことから、鉄鏃については第1次埋葬時の副葬品であると考えられる。

奥壁部東隅の床面では、鉄刀(25)が検出された。鉄刀は全長38.5cmで、東側壁に切っ先を接し、奥壁に柄部を接した状態で検出されたが、比較的浅い埋土中であつたため、腐食が著しく進行していた。

第2節 蔵見3号墳

1. 墳 丘

地山整形

本墳は、前述の2号墳の東に隣接しており、急傾斜面の中腹に位置している。地山整形は背後の傾斜した自然地形を更に鋭角的に削り込むことで、墳丘の基本面となるテラス状の段地形を造成する事前整地作業が行われている。しかし、2号墳から3号墳に至る背後の地山整形面は一体的に削平されており、3号墳の背後で特に変化が見られないことから、先行して築造した2号墳に伴う地山整形と推定される。従って3号墳の築造に伴う地山整形は、第4トレンチに見られる周溝面の掘り下げと、テラス状の南側段地形端部を更に階段状に掘り込むことにより、奥壁部の掘り方を掘り込み、側壁部では挿鉢状に掘り込んで石室の基底面としている。

墳 丘 (挿鉢14 図版7~9)

墳丘の構築方法については、前庭部側が崩壊しているため玄室部の側面から奥壁背後の限定された範囲での考察となった。墳丘の盛土は前述の地山整形によるテラス状の段地形の南端部を更に階段状に掘り下げることにより玄室部の基底面としており、テラス状の段地形面に掘り込んだ周溝面は、前庭部側の自然地形に沿って下り勾配となっている。従って、墳丘の盛土もこの面を基本的な基底面として盛土が施されている。

玄室の西墳丘部の第3トレンチでは、数段階にわたる築造工程が見られた。まず、地山を緩やかな角度で掘り下げて更に鋭角的に掘り込み石室側壁の掘り方とし、下段の石材を据えて側壁としているが、この際石材の安定を保つため小石を地山と石材の間に差し込み、続いて石材の上りまで盛土を施している。更に下段の石材上面から外方へ緩いスロープ状に傾斜した盛土を施して、2段目の石材搬入面を確保している。次に2段目の石材を側壁として積み重ねているが、ここでも石材を安定させるために下段と2段目の石材の間に小石の埋込みが見られた。2段目の石材上面から外方へ緩いスロープ状に傾斜した盛土を施して、3段目の石材搬入面を確保している。3段目も2段目と同様の作業工程を繰返して側壁が積み上げられているが、3

段目は石材を積み重ねた後、盛土によって石材を支えており、特に裏込め石は認められなかった。

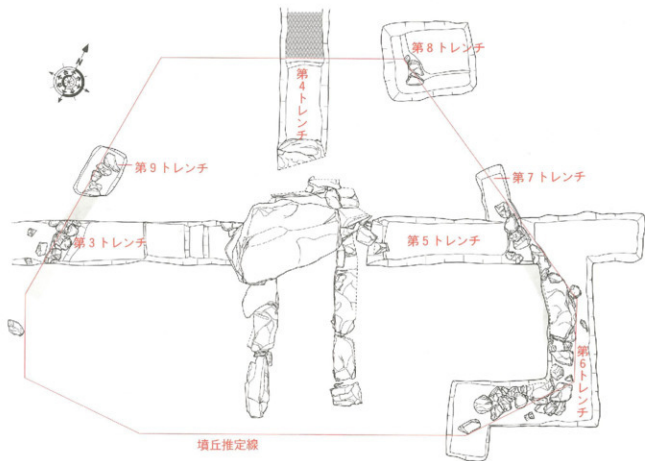
このように石材の積み重ねに伴う裏込めと、盛土を段階をおって交互に繰り返しており、盛土の大半は地山整形による廃土と思われる。

玄室の右墳丘部の第5トレンチでは、側壁の下段上面まで掘り下げを行ったが、側壁の崩壊する危険性があり、更に掘り下げて掘り方と盛土の工程を確認することはできなかった。しかし、2段目より上面では第3トレンチとほぼ同様の石材の積み重ねと盛土による構築過程が認められた。

奥壁背後の第4トレンチは、遺存する天井石が不安定で転落の危険性があり、奥壁背面を掘り下げて観察するトレンチは設定できなかった。したがって可能な限り近接したトレンチを設定したが、奥壁背面に裏込めされた凝灰岩の上面を検出したところで掘り下げを止めた。

このトレンチは、前述のテラス状の段地形面に設定したトレンチで、丁寧な地山整形を行なった後、奥壁の石材を据え、周溝の下端部から奥壁の石材上面まで盛土を施し、石室の周囲を固めることで第1次墳丘の盛土工程を終了している。次に石室の天井石を架構させることにより、積み上げられた3段の側壁に荷重を加え、更に安定させて第2次墳丘の工程となる天井石の上面を覆う盛土が施されており、この段階で墳丘の外形を整えて周溝面が造られている。

墳丘は、前述のとおり石室の西前庭部側の崩壊と側壁より、上面が削平されて遺存する天井石が地表に露頭しており、西前庭部側の墳裾と墳丘の高さを確認することはできなかった。しかし、墳丘の規模を示す周溝は、第3・4・5・8トレンチで検出され、墳丘の裾部を示す外護列石が第3・5・6・7・9トレンチ



挿図14. 蔵見3号墳丘平面図

0 S=1:80 2m

で検出された。この外部施設から墳裾部を追跡すると、石室の背面では中心軸に対して直交し、直線的な台形状に角度を変えて開いている。左墳裾の外護列石は崩壊によりここで途切れるが、東墳裾を示す外護列石は比較的良好な状態で遺存しており、玄室中央部に匹敵する両側で再び角度を変え、中心軸に対してほぼ直線的に平行して前庭部方向へ延びるが、前述の辺に比較して短辺となっている。次に袖部の墳裾に匹敵するあたりで更に鋭角的に内向し、直線的に前庭部方向へ至るが短辺で途切れる。後述の辺は、外護列石の遺存状況から中心軸に平行する外護列石がほぼ直角に内向する見方と、やや開いて内向する見方が考えられるが、後者が有力と考えられる。その根拠は、他の辺に配されている石材の大半は節理面を周溝面に直交させることにより、周溝内への転落を防ぐ一定の規則性が見られ、この辺で周溝面に直交した石材を分別するとやや開いて直線的に内向する外護列石となる。更に、この外護列石外方の石材には不安定なものや積み重ねが認められないことから、前庭部側に傾斜した墳丘裾部の石材が周溝面に転落したものと考えられる。

墳形は、石室の中心軸に対し、流失している石室の西前庭部面へ第5・6トレンチで検出されている外護列石面を置き換え、東西を対称的に見ると軸線上に辺を配する「多角形墳（変形八角形墳?）」となる。

古墳の規模は、前庭部側の明確さに欠けるが、これらの基礎資料から長径（東西）約11.6m、短径（南北）約8mと推定される。また、第4トレンチの周溝面で検出している墳丘裾部と第5トレンチで検出している外護列石の頂部では高低差が見られ、墳端部が前庭部側に約15°傾斜した墳丘であると推定される。

外護列石（挿図7・10・14 図版9～11）

本墳の外護列石は、墳裾部の第3・5・6・7・9トレンチで検出されており、貫入追跡調査では、第3トレンチから更に南方の流失斜面に露出した石材までの約1.5mに遺存していることが確認されている。

外護列石の構築にあたっては、奥壁部に匹敵する両墳裾部を起点として袖部脇の墳裾までが前述の形状を経て構築されている。起点部は、石材を積み重ねることはしないで、やや扁平に近い人頭大の石材を配列し、下降した傾斜面の前庭部方向へ掘えて行く過程で徐々に石材の厚みを増し、2段、3段と高くなっている。しかし、丁寧に積み重ねている2号墳の列石に比較すると、全体的に積み重ねの丁寧さに欠ける。

主体的に使用されている石材には、人頭大から握り拳大の河原石と山石が見られ、角礫凝灰岩が最も多く使用されているが、列石の配列が「く」の字状に角度を変える各コーナーは、墳丘が最も流失しやすいことから安定した大きな石材を据えている。最初のコーナーには、横長で玄室の腰石に匹敵する大きな凝灰岩が据えられており、角度の変化が明確に判る。次のコーナーには、やや丸味を持った卵形の安山岩が据えられており、外方には固定度を更に増すために数個の控石が据えられている。

外護列石の積み重ね状況は、列石の上を検出し、形状を確認する目的の追加トレンチでの制約により、地山面から一貫した観察はできなかったが、検出面での状況では2段又は3段の積み重ねが確認された。しかし、2号墳に見られた段階的な積み重ねによる過程は認められなかった。積み重ねられた石材の構築方法には、石材の節理面を周溝面に直交させて積むことにより、周溝内への転落を防ぐ一定の規則性が見られた。又、土層断面の観察では、築造の当初より外護列石の頂部から外面の下端部が露出し、墳丘の流失を防ぐ役目を果たしていたことが確認された。

周溝（挿図7・8・9・10 図版7・8）

3号墳の周溝は、第3・4・5・8トレンチで検出されており、明確に外縁部の規模を確認できるのは第

4 トレンチである。

第3 トレンチで検出している西墳端部の周溝内には、墳裾部に前述の外護列石が構築されており、列石の頂部から下端部に至る周溝側面は外護列石の外側面となっている。周溝内には、炭化物を多量に含んだ黒褐色の腐食土が厚く堆積しており、良好な遺存状態を保っていた。この周溝は、本墳の築造に先行して築造されていた2号墳の周溝面を意図的に切り込むことで、2号墳の外護列石外側面を3号墳周溝の外縁部に相当する面としている。従って、この第3 トレンチから墳丘の背面に至る周溝内は、2号墳と離別していくため地山を掘り込んだ周溝面が遺存していると考えられる。第3 トレンチでの周溝の規模は幅2.2m、深さ0.45mを測る。

第4 トレンチで検出している墳丘背面の周溝内には炭化物を多く含んだ褐色土と灰褐色土が流入土となって堆積しており、良好な遺存状態を保っていた。ここでの周溝の規模は幅2.3m、深さ0.4mを測る。

第5 トレンチで検出している東墳端部の周溝内には、墳裾部に外護列石が構築されており、列石の頂部から下端部に至る周溝側面は外護列石の外側面となっている。周溝内には、炭化物を多く含んだ暗褐色の腐食土が厚く堆積しており、良好な遺存状態を保っていたが、トレンチの制約により明確な外縁部を検出することはできなかった。第5 トレンチでの周溝の規模は幅2.0m（推定）、深さ0.4mを測る。

第8 トレンチは貫入追跡調査反応により、列石の可能性が認められたことで追加設定したトレンチである。このトレンチでは、トレンチ規模の制約により周溝面の全幅を検出することはできなかったが、西壁面と南壁面で墳裾部から周溝面の一部が検出された。墳裾部には、人頭大の自然石2個、握り拳大の割石1個が列石状に連なって検出された。この石列は、積み重ねた様子は見られず、外護列石のように墳丘の流失を防ぐ目的の列石とは考えられない。列石の据えられている位置は、トレンチの西・南壁面で検出している墳裾部の交点に位置しており、第5 トレンチで検出されている外護列石の直線延長線上でもあることから、墳裾のコーナーに意図的に据えられた標石的な石材と考えられる。

周溝を検出している各トレンチの調査結果から、多角形墳の裾部を約2.0m程度の幅で周溝が巡っていたと推定され、周溝外縁部を加えた古墳の規模は、長径（東西）約14m、短径（南北）約11mと推定される。

2. 石室

石室は等高線にはほぼ直交しており、主軸はN-25°-Wをとり、南方に開口する単室で右片袖型横穴式石室の埋葬施設である。

南西約200mの県道池谷福部停車場線と石室基底部の比高差は約16mを測る。

本墳も2号墳と同じく、3石の天井井で構成されていた中高式天井で、石材は奥壁部の1石を残して前庭部側の斜面下に崩落しており、遺存する1石は不安定であるがほぼ原位を保っている。平面的には、玄室部を残して羨道部から前庭部側が崩落しており、遺存状態は極めて悪い。

遺存する石室の全長は左側壁部で4.9m、右側壁部で4.65mを測り、石室の壁面を構成するL石は全て近辺で産出されている凝灰岩が用いられ、側壁間の隙間を塞ぐ詰め石には玄武岩が充てられている。玄室と羨道部を区画する右片袖部は、奥壁部から直線的に配されており、側壁が前庭部側の最端部でわずかに内面へ突出している。他の側壁は平らな節理面を内面に向けて据えられているのに対して、内面へ直交させる石材の用い方に特徴的な相違が見られることで、袖部と考えられる。

流入土は、全体的に約10cm程度が堆積しており、床面を検出するために掘り下げた結果、須恵器の坏蓋1

点(48)が検出され、出土状況から原位置に遺存するものと考えられる。玄室内の中央部付近では、肥料袋の断片などが混入していたことから、果樹園の一時的な倉庫に転用されていたものと思われる。また、2号墳と同様に遺物採集時には羨道部周辺と玄室内の流入土面に多くの遺物が散乱していたことから、擾乱後に遺物が搬出されたものと考えられる。

石室掘り方

石室の基底面は前述の墳丘端部に比例し、前庭部側に向けて下り傾斜となっており、尾根中腹の等高線に直交して石室の主軸が取られている。石室側面の掘り方は地山を逆台形に掘り込み、深さは約140cmを測る。奥壁の背面では、テラス状の段地形面から約1.7mを鋭角的に削り込んでいる。掘り方の規模は、玄室部の東西方向で約3.5mを測る。

玄室 (挿図15 図版12)

玄室長は、西側壁部で4.3m、東側壁部で4.25mを測る。玄室幅は奥壁部で1.35m、袖部で1.45mを測る。玄室の側壁は、最も高い部分で床面から1.75mを測る。

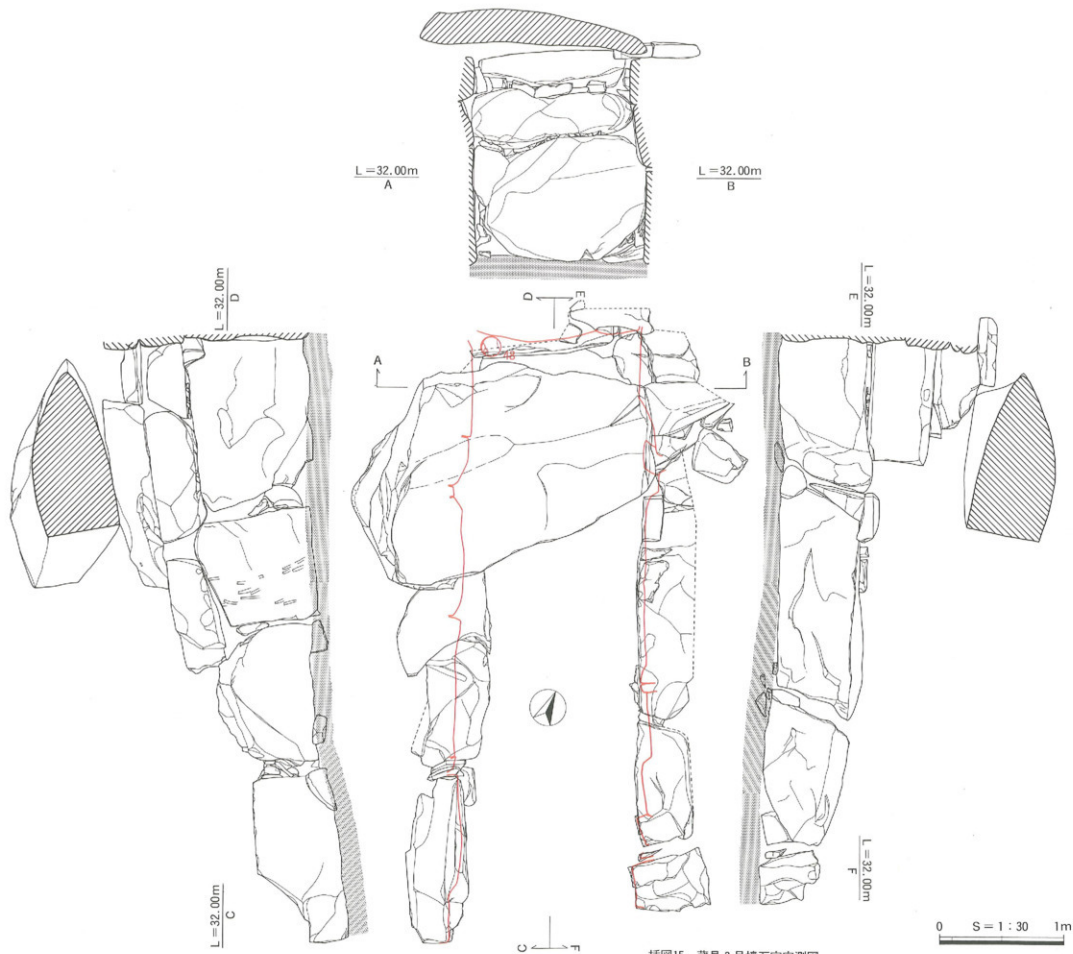
玄室の平面形は奥壁部と比較して袖部がわずかに広がるが、腰石は直線的に配されていることから、長方形を意識している。壁面は東側壁の崩壊により内面にやや迫り出しているが、両側壁共に垂直的に立ち上がる構造と考えられる。

奥壁は3段の石材で構成されており、下段は左側が大きな石材で高さ1.0m、幅1.3mの内面が平らな凝灰岩を据え、東側の隙間に高さ0.5m、幅0.3mの逆三角形を呈する凝灰岩と玄武岩の小石を嵌め込み、主体的に2石で構成されている。2段目は、高さ0.4m、幅1.3mで隅が丸味をもって内面が平らな凝灰岩を横一文字に積み重ね、3段目は高さ0.27m、幅1.2m角柱を呈する玄武岩を横一文字に積み重ね、2段目と比較してやや小型の石材を積み重ねている。この各石材の隙間を塞ぐ詰め石には握り拳大から人頭大の玄武岩が丁寧に詰め込まれており、3段に積まれた奥壁の高さは1.65mを測る。

西側壁は、下段に内面が平らな4個の凝灰岩を据え、奥壁の石材が最も高く、袖部に向けて階段状に低い石材が据えられている。2段目は、奥壁部からやや丸味を持つ凝灰岩を積み重ね、3個の石材が遺存している。3段目は、2個の石材が遺存しており、奥壁部から角柱を呈する玄武岩を2段目の石材の接点に架けて、横一文字に積み重ねている。奥壁側から2石目は突出した内面を切石状に調整する数条の鰐痕が認められ、何れも上から下へ降ろす打痕である。下段と2段目の接地面には、石材の安定化を図る小石が詰められていた。3段に積まれた奥壁部の高さは1.65mを測り、各石材の隙間を塞ぐ詰め石には握り拳大から人頭大の玄武岩が丁寧に詰め込まれている。

東側壁は、下段に内面と上面が比較的平らで横長の凝灰岩3個を据え、袖部に向けてやや低い石材が据えられている。2段目以降は、その大半が転落しており詳細は不明であるが、遺存している奥壁部の2段目は、内面と上面が比較的平らで横長の凝灰岩ある。3段目は、角柱を呈する玄武岩を横一文字に積み重ねている。下段と2段目の接地面には石材の安定的な測る小石が詰められていた。3段に積まれた奥壁部の高さは1.65mを測り、各石材の隙間を塞ぐ詰め石には握り拳大から人頭大の玄武岩が丁寧に詰め込まれている。

床面は、橙褐色の地山を整形した際の残土がほぼ平坦に敷き詰められていたが、棺の置かれていた痕跡等の遺構は確認できなかった。



挿図15 蔵見3号墳石室実測図

羨 道

羨道と玄室を区分している袖部は、前述の石室内面へ突出する石材の用い方から袖部と考えられるが、この石材の前底部側に幅15cm、深さ35cmの断面がU字形を呈する人為的な抉り痕が認められ、対面する西側壁には自然節理面の窪み面が見られることから、嵌め込み式の閉塞石が遺存していた可能性がある。

前底部側に更に続くと推定される羨道部は、この袖部の石材を残して大きく崩壊しており、規模と構築方法等の詳細は不明である。

3. 遺物出土状況 (挿図15 図版12)

今回の調査では、石室内から出土した遺物は坏蓋1点と陶棺片6点である。遺物の検出状況は、奥壁部の西隅の床面で内面が上向き状態の坏蓋(48)が検出され、流入上中より散乱状態で陶棺片が検出された。

このように検出された遺物は、量的に少数であったが、平成3年の表面採取時では、前述のとおり玄室から前庭部周辺の表土中に陶棺片・須恵器片が石材と混在して散乱していた。これは石室が果樹園の作業小屋として使用されていた際に攪乱を受け、玄室内の埋土と共に前庭部周辺に搬出されたことによるものと考えられる。

表面採集では、簡易的な遺物の採取に専念し、実測等は行われていないが、玄室内の東側壁部で自立していると思われる陶棺の4脚と、これに接合する身の底部片が表採されている。脚が自立していたことと、これに接合する身の底部片は、陶棺の原位置を示すものと考えられ、陶棺は東側壁部に寄せて安置されていた可能性が高い。

引用・参考文献

- 岩美町教育委員会『山ノ神5号墳発掘調査報告書』1991
- 岩美町教育委員会『高野坂古墳群発掘調査報告書』1992
- 国府町教育委員会『史跡梶山古墳発掘調査報告書』1994
- 福部村教育委員会『福部村内遺跡発掘調査報告書』1995
- 郡家町教育委員会『福本5号墳発掘調査現地説明会資料』1995
- 寺社卜博「地方の多角形墳」『生産の考古学』倉田芳郎先生古稀記念会1997

第V章 出土遺物

第1節 蔵見2号墳の遺物

蔵見2号墳では、表面採集されたものも含めて石室床面及び流入土中から陶棺及び後世の流入遺物以外に須恵器23点、土師器1点、鉄器7点が出上している。

1. 須恵器(1~23)

蓋 坏

坏身口縁に立ち上がり有する蓋坏(1~5)は、蔵見古墳群出土須恵器中で最も古相を示す。坏蓋(1~2)は口径11.5と12.0cm、坏身(3~5)は口径8.5~8.9cmを測り、坏蓋が坏身に対してやや口径が大きいが、最も小型化した蓋坏である。天井部及び底部外面は、ヘラケズリ調整を省略し、ヘラ切り後ナデ調整あるいは未調整のもの。いずれも焼成は良好で、色調は明灰色から青灰色を呈する。なお、坏身には全て底部内面に径5mmの竹管状刺突による記号が認められる。

蓋

蓋(6~12)は、内面にかえりを有する蓋(6~9)とかえりが消失して端部を折り返す蓋(10~12)がある。前者は口径13.8~14.0cmを測り、いずれも口縁内面のかえりが断面三角形の痕跡的なものとなっているが、6はつまみが擬宝珠形なのに対して、7・8は扁平な擬宝珠形である。後者12は口径15.2cmと大型化し、口縁端部の折り返しも大きく、つまみは輪状つまみである。10・11は口縁端部の折り返しは矮小化し、つまみは小型の扁平つまみである。焼成はいずれも良好である。

坏

坏(13~20)は、高台の付かない坏(13)は1点だけで、口径13.7cmを測り、底部外面を不整方向ヘラケズリする。他は全て高台の付く坏(14~20)である。このうち14が16.8cmと最も口径が大きく、セットになる蓋が見当たらない。高台は低い。次いで、15が15.1cmを測り、12とセット関係が認められる。「ハ」字形に開くしっかりした高台をもち、底部外面にナデ調整以前のヘラ記号、体部外面下半に「×」のヘラ記号がある。焼成良好。16~20はいずれも12.3~13.2cmを測る小型の坏で、高台の形状も同様である。焼成は不良なものが多い。

長 頸 壺

長頸壺(22・23)は頸部と肩部に沈線を施すもので、胴部には明瞭な稜がある。22は器高23.0cmを測り、胴部が筒状なのに対して、23は胴部が算盤玉状を呈し、器高は21.1cmを測る。焼成良好。

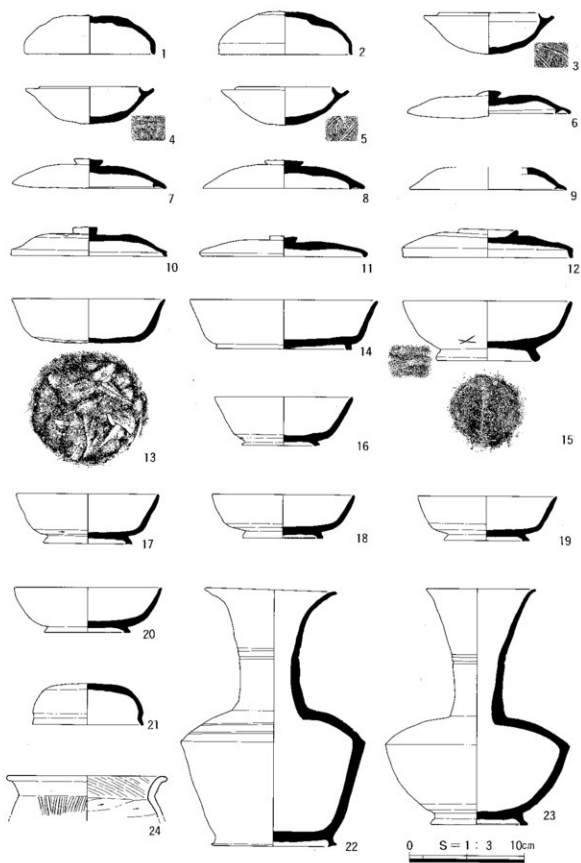
短頸壺蓋

蓋(21)は、口径9.9cmを測り、口縁端部が小さく外反する。短頸壺等の蓋と考えられる。焼成良好。

2. 土師器(24)

甕

復原口径14.4cmを測る小型甕形土器。口縁はくの字状で、端部が外反する。外面及び口縁内面は刷毛目調整し、胴部内面はヘラケズリする。



挿図16. 蔵見2号墳出土土器（須恵器・土師器）

3. 鉄器

鉄刀 (25)

切先から8cmくらいまでが、両刃造りの剣状となり、茎部先端を欠損する残存長38.5cmの直刀。関部は、関が斜角に切れ込む片関で、残存する茎部には目釘穴は認められない。全体に錆化が著しく、錆彫れも切先及び関部にみられる。

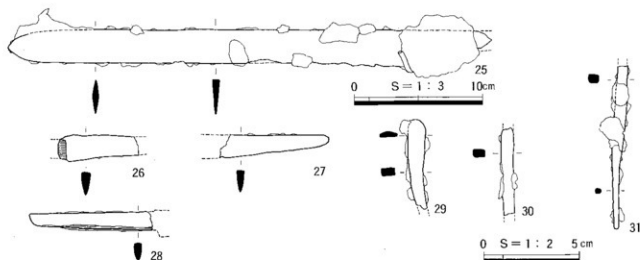
刀身長は、34.5cmの短刀となる。刀身幅は2.7cm、背幅は0.6cmの平造り。関部に青銅製輪状の資金具が錆着している。

刀子 (26~28)

26は研減りが顕著な刀身基部から両関の関部、茎部は幅1.0cm、茎背幅は0.5cmを測り、木質が残存する。28は幅1.0cm、背幅は0.4cmを測る茎部で、木質が残存している。26と28は同一個体の可能性が高い。27は刀身先端部で、切先は丸くなっている。背幅は0.4cm。27は26・28とは別個体であり、少なくとも2個体の刀子が存在したことがわかる。

鉄鏃 (29~31)

いわゆる尖根式鉄鏃で、長頸壱箭式の同一個体と考えられる。29の鏃身頭部は平面形は不明であるが、断面片丸造りと思われる。30の篋被部は断面長方形。31の関から茎部は、関部が撫角となる。



挿図17. 蔵見2号墳出土鉄器

第2節 蔵見2号墳の陶棺

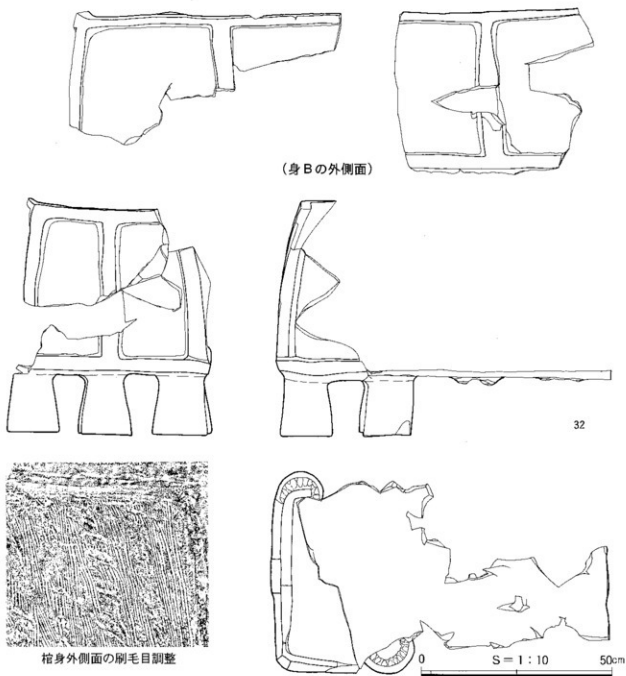
陶棺 (32)

1991(平成3)年に、隣接する3号墳とともに表面採集したものと、今回の発掘調査において石室流入土中から10片の破片が出土したものである。

蔵見2号墳から採集された陶棺片は約150点に及び、棺身で約25%、棺蓋で約5%が残存していた。棺身の底・側面と脚部が比較的遺存していたのに対し、棺蓋については確認できた部分はほとんどなく、形態も3号墳とほぼ同じであることが確認できるに過ぎない。

棺身は一体成形後に分割され、垂直に切り離された合わせ目には工具の静止痕跡が明瞭に残っている。遺

存する身Aで測ると片側の長さ90.0cm、脚部の最大幅53.5cm、脚部を含む最大高60.0cmとなり、身A・Bを合せた全長は180cm前後と考えられ、3号埴陶棺とはほぼ同規模である。平面形は隅丸長方形を呈し、各側面が内傾して上部が狭まっている。破断面等の観察によると成形は粘土紐(帯)の積み上げによるもので、7～8cmの外上りの積み上げ単位が認められる。棺蓋と棺身の合わせ目は平坦である。各合わせ目の縁辺部外面・棺底部外面・四隅稜線と小口中央・各側面中央には、窓枠状に幅5～7cmの幅広の突帯が巡っており、全部で12面に区画されている。脚部はロクロ成形されたもので、下が円錐形に開く筒状を呈し、高さ15.0cm、下端径15.0cm前後を測る。底部外面に3行8列、併せて24本が取り付けられている。脚の接合にあたっては脚部接合面に指で凹凸をつけて接合を強固にする工夫がなされている。器壁の厚さは部位によって異なり、棺身の側面と底面で2.0cm前後あるが、脚部は1.5cm程度で重量のある陶棺を支えるには薄く仕上げられ



挿図18. 蕨見2号埴陶棺(身A)実測図

ている。3号墳陶棺と比べると脚が1行多く、棺身側面に垂直方向の突帯が数条みられるという違いが認められる。このように復原された陶棺は、残存する棺蓋破片と3号墳陶棺との比較から「須恵質四注家形陶棺」の特徴を備えた陶棺と考えられる（間壁霞子1983）。

陶棺外面には粗い刷毛目調整が残っており、突帯は刷毛目調整後に貼り付けられている。その他はナデ調整で仕上げられている。全体に須恵質に焼成されており、棺身は青灰色～明灰色を呈して焼成良好なのに対し、火廻りの関係で底面は淡黒灰色を呈して焼成がやや不良である。胎土は砂粒を多く含んで粗く、胎土・焼成や製作手法等は3号墳陶棺と概ね共通すると考えられる。

また、2号墳の陶棺片は3号墳陶棺に比べると量が少なく、全体を復原するまでには至っていない。

第3節 蔵見3号墳の遺物

蔵見3号墳では、石室床面及び流入上中から陶棺及び後世の流入遺物以外に須恵器53点、銅製品1点が出土している。

1. 須恵器 (33～84)

蓋

蓋 (33～53) は、内面にかえりを有する蓋 (33～35) とかえりが消失して端部を折り返す蓋 (36～53) がある。

前者は、33はかえりが他に比べると明瞭で、つまみもやや擬宝珠形である。33・34は口径13.6～14.0cmを測るが、35は口径17.0cmと大形化するとともに口縁内面のかえりは断面三角形の痕跡的なものとなっている。34・35のつまみは扁平な擬宝珠系つまみとなる。

後者には、擬宝珠系つまみがつくもの (36～49) と輪状つまみが付くもの (50～53) がある。擬宝珠つまみは大半が扁平なものであるが、単純な扁平つまみに退化したものもみられる。口径13.6cmと極端に小さい45を除けば口径15.3～16.5cmを測る大型品である。43の天井部内面にはヘラ記号が認められる。

輪状つまみ蓋は、比較的厚手で、かえりもつまみもしっかりしたものが多く、口径14.8cmの51を除けば口径15.6～16.0cmを測る。

焼成は、42・49がやや不良なのを除けば概ね良好である。

坏

坏身 (54～72) は、すべて「ハ」字形に開くしっかりした高台を中心寄りに貼り付けるもので、無高台の坏身はみられない。底面はヘラ切り後、ナデ調整されている。

坏部が丸みのある碗状で、高い高台の付く54～57と、坏部が底部と口縁部との境に稜を持ち、高台がやや低い58～72がある。前者は口径13.4～14.2cm、器高は4.8～5.8cmを測る。後者はさらに口径が13.0cm未満のやや小形の坏とこれを越えるやや大きめの坏に細分される。

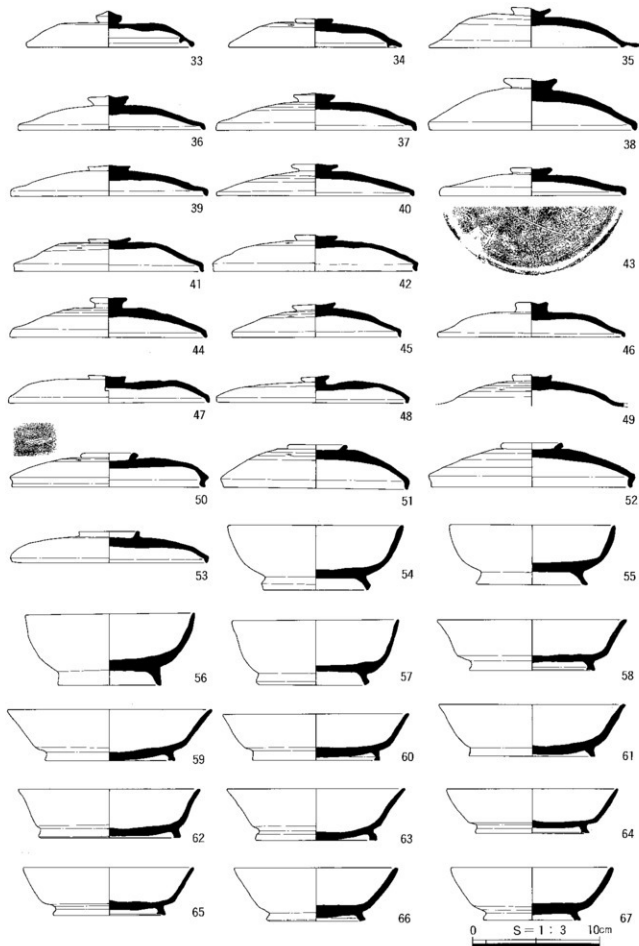
焼成は、62・63が不良なのを除けば概ね良好である。

高 坏

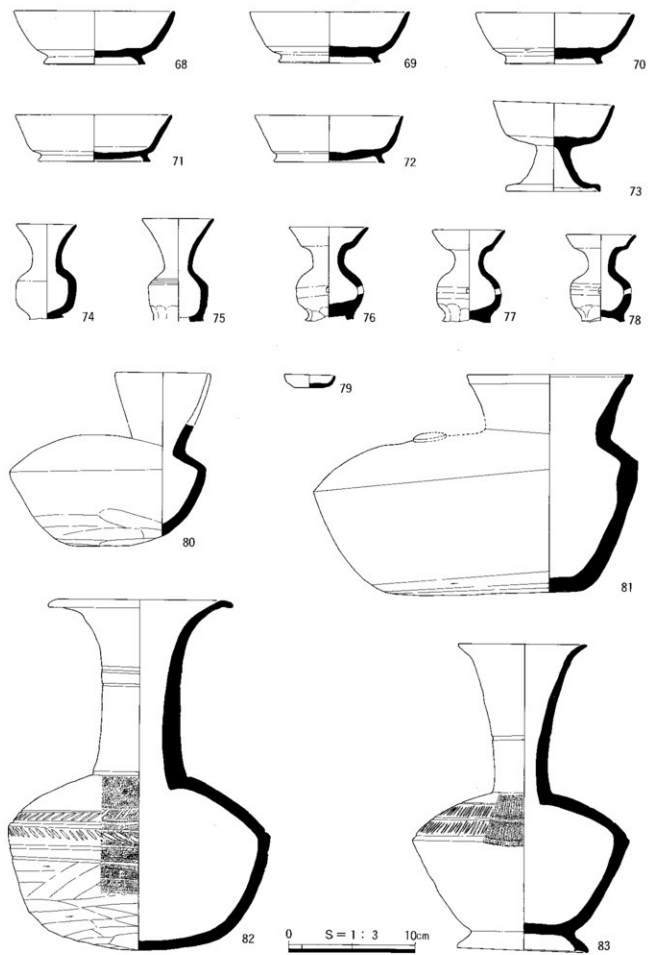
高坏 (73) は器高7.3cmの小形無蓋高坏で、脚部には透かし孔はない。坏部の底部外面にはカキメがみられる。焼成良好。

装飾須恵器

装飾付須恵器には子壺 (74～78) と子坏79が認められるが、親となる壺あるいは器台等の形状等は不明で



挿図19. 蔵見3号墳出土土器（須恵器①）



挿図20. 蔵見3号墳出土土器(須恵器②)

ある。子壺は74・75の2個体が器高7.6、8.2cmの長頸壺、76～78の3個体が器高7cm前後の壺を模している。いずれも有底であるが、底部穿孔は認められない。子坏79は口径4.1cmを測る。いずれも自然釉が顕著で、焼成は良好である。

平 瓶

平瓶には大小2種類がみとめられ、小型の平瓶80は胴部最大径14.0cm、大形の平瓶81は同じく26.2cmを測り、ともに肩部には明瞭な稜がある。後者は口縁部に段の痕跡をとどめ、胴部上面には円盤状装飾もみられる。いずれも自然釉が顕著で、焼成は良好である。

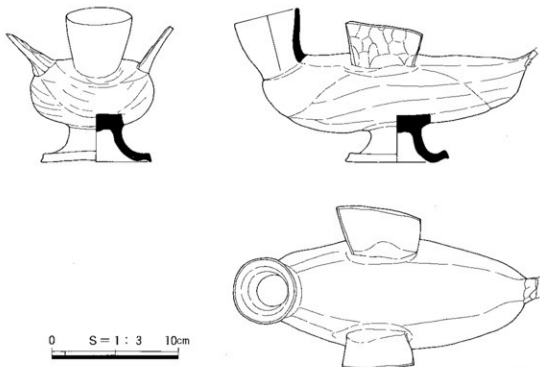
長 頸 壺

長頸壺(82・83)は肩部に明瞭な稜があり、器高28.3cmを測る無高台の82と器高24.8cmを測る高台が付く83がある。いずれも頸部に沈線、肩部に沈線と刺突紋による施紋がみられる。82は底部外面が手持ちヘラケズリされており、白っぽい胎上に特徴があり、器形等からみて他地域からの搬入品と考えられる。いずれも焼成は良好である。

鳥 形 瓶

鳥形瓶(84)は長く伸びた筒状の体部上位に台形の粘土板を貼り付けて翼を広げた様子を表した珍しいもので、口縁部から体部の形状は平瓶に近い。底部には脚部が付いている。尾部を少し欠損するが残存全長24.5cm、体部幅10.0cm、羽を広げた全幅13.2cm、脚部を含む全高12.4cm、口径5.4cmを測る。焼成良好。

鳥形瓶は6世紀末から7世紀にかけて中国地方を中心に盛行し、現在までに25例が確認されており、鳥取県でも東伯郡東郷町と三朝町の出土例に次いで3例目となる(愛知県陶磁資料館1995、正岡1997)。

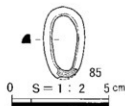


挿図21. 蔵見3号墳出土鳥形瓶

2. 銅製品

鐸 (85)

平面楕円形の青銅製喰出鐸。外面は丸味を持つが、柄に接する面と軸口に接する面は平坦。長径3.8cm、短径2.2cm、環断面幅0.45cm、高0.50cmを測る。



第4節 蔵見3号墳の陶棺

鵺尾付陶棺 (86)

この陶棺は、1976 (昭和51) 年に鳥取県教育委員会と福部村教育委員会が行った遺跡分布調査において確認されたもので、その際にサンプル的に採集されたものと、1991 (平成3) 年に、福部村教育委員会が隣接する2号墳とともに行った表面採集で出土した破片を3ヶ年をかけて陶棺全体の復原を行ったものであり、今回の発掘調査においても石室流人土中から6片の陶棺の破片が出土している。

蔵見3号墳から採集された陶棺片は約280点に及び、棺身で約50%、棺蓋で約30%が残存していた。棺身の底面と脚部が比較的良く遺存していたのに対し、棺身上部及び蓋については確認できた部分は多くない。なお、これらの陶棺片の整理の過程で、従来知られている陶棺の部分とは考えられない特徴のある破片が確認され、その形状から陶棺に付く小形鵺尾と推定した。鵺尾の付く陶棺の存在は従来より指摘されていたが、鵺尾と陶棺本体が現存する例はなく、本例は鵺尾付陶棺の貴重な確認例である。

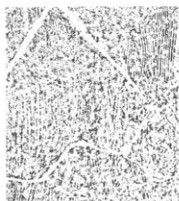
復原された陶棺本体は、全長185.0cm、最大幅50.0cm、脚部を含む最大高84.0cmを測る大形の陶棺である。棺身は高さ63.0cmで、平面形は隅丸長方形を呈し、各側面が内傾して上部が狭まっている。蓋は最大高が24cm、蓋幅/蓋高指数は0.68となり、幅に比して比較的高さがある。四隅にはやや不明瞭な棟線があって「四注式屋根形」を呈し、横断面形は蒲鋸形となっている。棟部両端には径7cmの円孔が穿たれている。

棺蓋・棺身共に一体成形後に分割され、棺蓋には斜めに切り離した工具痕跡が認められ、合わせ目は段を付けた組み合わせとなっている。棺身は垂直に切り離されており、合わせ目には切り離しの際の工具静止痕跡が一定のピッチで明瞭に残っている。棺蓋と棺身の合わせ目は平坦である。各合わせ目の縁辺部外面には、窓枠状に幅5~7cmの幅広の突帯が巡っている。脚部はロクロ成形されたもので、下が円錐形に開く筒状を呈し、高さ15.0cm、下端径17.0cm前後を測る。底部外面に2行8列、併せて16本が取り付けられている。器壁の厚さは部位によって異なり、棺身の側面と底面で2.5~3.0cm前後あるが、脚部は1.5cm程度で重量のある陶棺を支えるには薄く仕上げられている。棺蓋の器壁は2.5~3.5cm前後のほぼ均一な厚さである。このように復原された陶棺は、「須恵質四注家形陶棺」の特徴を備えている。

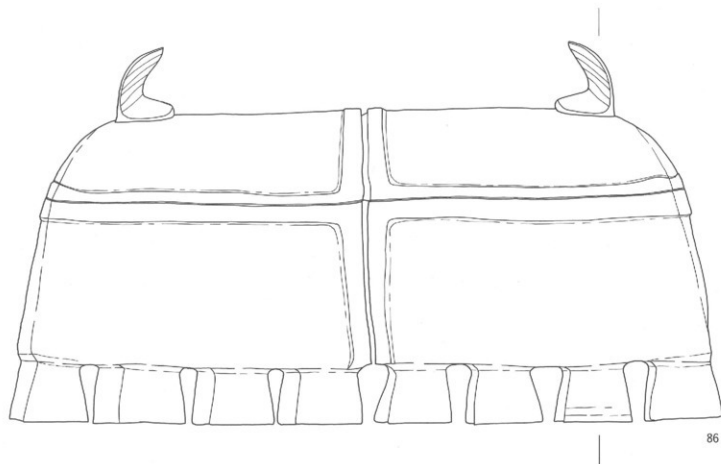
陶棺の復原過程で注目されたのは、四注式の屋根形を呈する蓋の棟部両端に小型の「鵺尾」が装着されたと考えられることである。鵺尾は先端を少し欠いた上半部約14cmが残存しており、厚さ3~4cm、幅は広いところで14.2cmを測る。脊線は中央に稜線を持ち、沈線で山形の紋様を描いており、山形は5単位が認められる。鵺尾は下半部が欠損しているため、棺蓋への装着方法が不明であるが、畿内型須恵質四注家形陶棺の蓋には、陶栓をはめる円孔が妻側斜面にあるのに対して、本陶棺では鵺尾が置かれるべき屋根形の棟部端に円孔が認められたことから、鵺尾の下面へ栓状突出部をつけ、これを円孔へはめ込む方法を想定した。復原した鵺尾の高さは20cm前後と推定される。また、対になる鵺尾細片も出土しており、鵺尾は2個体が存在したことがわかる。

陶棺外面には粗い刷毛目調整が残っているが、その他はナデ調整で仕上げられている。須恵質に焼成され

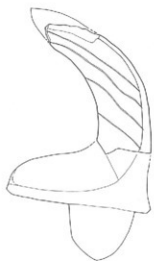
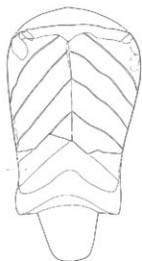
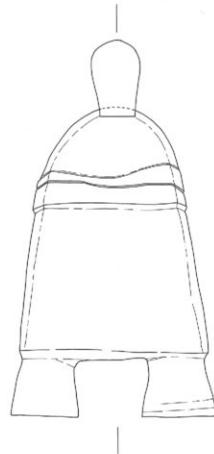
挿図22.
蔵見3号墳出土銅製品



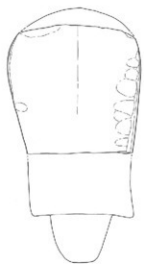
外側面の刷毛調整



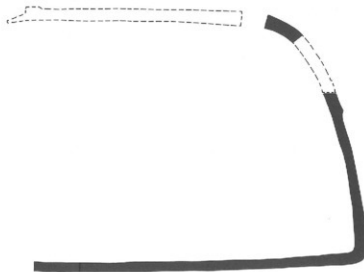
86



鱗尾



0 S = 1 : 4 10cm



0 S = 1 : 10 50cm

挿図23 蔵見3号墳出土陶棺及び鱗尾実測図

ているが、全体にやや焼きがあまりく、棺身と脚部の外面は黄灰色～淡灰色を呈し、黒斑状に淡黒灰色の部分
が認められる。内側面は淡灰色、底面は黒灰色を呈しているが、焼成時に蓋坏類を置いていたと考えられる
径4.0～6.5cmの淡黄灰色の円形斑が底面に17ヶ所認められ、陶棺の製作に須恵器工人が関与していたことを
示している。蓋は内外面共に淡黄灰色を呈している。胎土は砂粒を多く含んでおり粗い。彫尾の色調・焼成・
胎土は陶棺本体と一致する。

なお、木陶棺は復原に際して石膏に代えてエポキシ樹脂を用いて修復し、当時の姿に復原されている。

第5節 後世の遺物

石室流入土中から古墳に伴わない後世の遺物を少量検出した。87～89は2号墳出土の鍋、90は3号墳出土
の羽釜である。

鍋 (87～89)

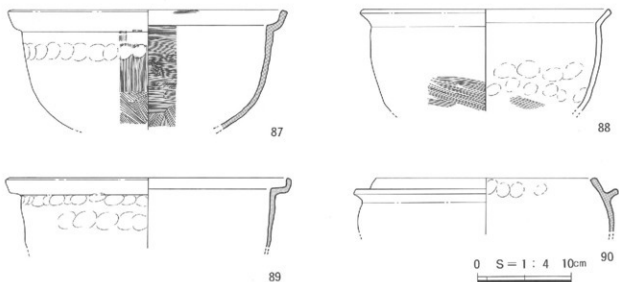
87・89は口縁部が屈曲して直立する浅身の鍋で、87は瓦質で内外面を丁寧にハケメ調整する。復原口径29.
8cm。89は瓦質で、外面は指頭圧痕で凹凸が著しいが、煮沸使用による風化が著しい。復原口径30.4cm。

88は口縁部が「く」の字状に屈曲する鍋。土師質で、外面はハケメ調整、内面ユビオサエである。使用に
よる煤の付着が著しい。復原口径26.6cm。

羽釜 (90)

90は体部が内湾し、口縁部の鐙は斜め上方に突出する瓦質羽釜。

これらの遺物は、いずれも12世紀後半～13世紀の煮沸形態の土器類（鍋・釜類）であり、平安時代末から
鎌倉時代には、石室を転用して生活が営まれた状況が推定される。



挿図24. 蔵見2・3号墳出土土器（瓦器・土師質土器）

<引用・参考文献>

- 愛知県陶磁資料館1995『古代の造形美 装飾須恵器展』
- 正岡睦夫1997『愛媛県小松町出土の鳥形瓶』『古文化談叢』第38集
- 間壁菫子1983『岡山の陶棺』『岡山の歴史と文化』

①口径 ②器高 ③最大径 ④底部径 ⑤脚部径 ⑥長さ ⑦幅 ⑧厚さ ※復元値 △残存值

遺物番号 所在地 図版番号	作 番 号	出 土 位 置	器 種	法 量 (cm)	形 態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1 16 13	KM2-15	2号墳	坏蓋	①14.0 ② 2.7	口縁部は直立する。 天井部は平坦。	外面天井部へラ切り後ナデ。	大粒の砂粒を含む。	良好	明灰 ～暗灰色	'91表採
2 16 13	KM2-11	2号墳	坏蓋	①12.0※ ② 3.8	口縁部は直立する。 薄手。	外面天井部へラ切り後未調整。 内面天井部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良好	明灰色	'91表採
3 16 13	KM2-87	2号墳	坏身	① 8.8 ② 3.7	立上りは、薄手でごく短い。	外面底部へラ切り後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良好	明青灰色	'96調査
4 16 13	KM2-5	2号墳	坏身	① 8.9 ② 3.3	立上りは内傾し、ごく短い。	外面底部へラ切り後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	微砂粒を含む。	良好	淡青灰色	'91表採 内面底部 刺突記号
5 16 13	KM2-18	2号墳	坏身	① 8.5 ② 3.4	立上りは内傾し、ごく短い。	外面底部へラ切り後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	微砂粒を含む。	良好	灰 色	'91表採 内面底部 刺突記号
6 16 13	KM2-80	2号墳	蓋	①14.5 ② 2.5	扁平状つまみ。 かえりは短く、口縁部より突出しない。	外面ヘラケズリ後ヨコナデ。 内面天井部不整方向ナデ。 ロクロ右回転。	礫粒を含む。	良好	暗青灰色	'96調査
7 16 13	KM2-82	2号墳	蓋	①13.8 ② 2.6	扁平な扁平状つまみ。 かえりは短く、口縁部より突出しない。	外面天井部へラケズリ後ナデ。 ロクロ右回転。	微砂を多く含む。	良好	明灰 ～灰白色	'96調査 自然釉
8 16 13	KM2-83	2号墳	蓋	①14.4 ② 2.6	扁平な扁平状つまみ。 かえりは短く、口縁部より突出しない。	外面天井部へラケズリ後ナデ。 内面天井部不整方向ナデ。 ロクロ右回転。	微砂を含む。	良好	明灰色	'96調査
9 16 13	KM2-8- 9	2号墳	蓋	①14.0※	かえりがごく短く、口縁部より突出しない。	口縁部内外面ヨコナデ。	微砂粒を含む。	良好	青灰色	'91表採
10 16 13	KM2-1	2号墳	蓋	①14.0 ② 2.7	扁平な扁平状つまみ。 天井部は平坦。かえりは薄く、端部は小さく折り返す。	外面天井部へラケズリ。 内面天井部不整方向ナデ。 ロクロ右回転。	微砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採 口縁スス 付着
11 16 13	KM2-81	2号墳	蓋	①15.0 ②1.85	扁平な扁平状つまみ。 天井部は平坦。 口縁部は小さく折り返す。	外面天井部へラケズリ後ナデ。 内面天井部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良好	淡灰色	'96調査 蓋に微かな 痕跡
12 16 13	KM2-2	2号墳	蓋	①15.2 ② 2.6	輪状つまみ。 かえりは薄く、端部を折り返す。	外面天井部へラケズリ。 内面天井部不整方向ナデ。 ロクロ右回転。	微砂を含む。	良好	青灰色	'91表採 蓋に灰土 痕跡
13 16 13	KM2-6	2号墳	坏	①13.7 ② 4.0	高台は付かない。 口縁部が僅かに外反する。	外面底部不整方向へラケズリ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良好	明灰 ～暗灰色	'91表採
14 16 13	KM2-12	2号墳	坏	①16.8 ② 4.4	低い高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。 態は不明。	礫粒を含む。	不良	灰白色	'91表採
15 16 14	KM2-3	2号墳	坏	①15.1 ② 5.4	高い高台は外方に踏ん張る。 腕状の坏部。	外面底部へラ記号後ヨコナデ。 内面底部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	暗青灰色	'91表採 へラ記号 あり
16 16 14	KM2-4	2号墳	坏	①12.4 ② 4.4	高台は外方に踏ん張る。 口縁は外傾する。	外面底部周辺へラケズリ後ナデ。	微砂粒を多く含む。	良好	灰白色	'91表採
17 16 14	KM2-78	2号墳	坏	①12.8 ② 4.4	高台は外方に踏ん張る。 口縁部は外傾する。	外面底部へラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。 ロクロ右回転。	微砂粒を含む。	良好	暗青灰色	'96調査
18 16 14	KM2-79	2号墳	坏	①12.7 ② 3.9	高台は外方に踏ん張る。 口縁部は外傾する。	外面底部へラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	やや不良	明灰色	'96調査
19 16 14	KM2-84	2号墳	坏	①12.3 ② 4.0	高台は外方に踏ん張る。 口縁部は外傾する。	外面底部へラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	微砂粒を含む。	不良	灰白色	'96調査
20 16 14	KM2-85	2号墳	坏	①13.2 ② 4.0	高台は外方に踏ん張る。 口縁部は外傾する。	磨滅により調整不明。	礫粒を含む。	不良	淡灰褐色	'96調査 2次焼成
21 16 14	KM2-86	2号墳	蓋	① 9.9 ② 3.7	口縁は小さくくびれて外反する。 体部は筒状。	外面底部へラ切り後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良好	暗青灰色	'96調査

挿表2. 蔵見2・3号墳出土土器観察表(1)

遺物番号 発掘番号	注記番 号	出土 位置	器 種	法 量 (cm)	形 態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
22 16 14	KM-7	2号墳	長頸壺	①11.8 ②23.0 ③16.5 ④11.2	口縁部は外反し、筒状の胴部は肩部に接をもつ。高台は外方に膨らむ。頸部と肩部に沈線。	外面ヨコナデ。	微砂粒を含む。	良好	暗灰色	'91表採
23 16 14	KM-77	2号墳	長頸壺	① 9.8 ②21.1 ③16.4 ④ 8.6	口縁部は外反し、算盤玉状の胴部は接をもつ。高台は外方に膨らむ。頸部に2条の沈線。	外面胴部下半~底部ヘラケズリ後ナデ。	砂粒を含む。	良好	明灰色	'96調査
24 16 14	KM-88	2号墳	壺	①14.4※	「く」字状口縁で、端部は肥厚する。	外面胴部粗いハケメ。内面口縁粗いハケメ。胴部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	やや不良	淡黄褐色	'96調査 土師造
32 18 15	KM-89	2号墳	陶甗		蓋の形状は不明。甗身には福広の文帯を貼り付け、脚は3行8列。身は2分型。	甗身・脚部外面ハケメ。内面ナデ。	砂粒を含む。	良好	青灰 ~明灰色	'91表採 須志賀
33 19 16	KM-1	3号墳	蓋	①13.6 ② 2.9	擬宝珠つみ。天井部は平直。かえりは短く、口縁部より突出しない。	外面大井部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	暗青灰色	'91表採
34 19 16	KM-2	3号墳	蓋	①14.0 ② 2.3	扁平な円形つみ。天井部は丸い。かえりは短く、口縁部より突出しない。	外面大井部ヘラケズリ。	砂粒を少し含む。	良好	灰白色	'91表採
35 19 16	KM-3	3号墳	蓋	①17.0 ② 3.2	擬宝珠つみ。天井部は丸い。かえりは微小化し、口縁部より突出しない。	外面天井部ヘラケズリ後ナデ。内面大井部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	淡灰色	'91表採
36 19 16	KM-4	3号墳	蓋	①15.2 ② 2.8	擬宝珠つみ。天井部は丸い。かえりは消失し、口縁部は小さく折り返す。	外面天井部ヘラケズリ後ナデ。	微砂粒を含む。	良好	淡灰色	'91表採 自然釉
37 19 16	KM-5	3号墳	蓋	①16.2 ② 3.0	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。かえりは消失し、口縁部は小さく折り返す。	外面天井部ヘラケズリ後ナデ。内面大井部不整方向ナデ。	微砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採
38 19 16	KM-10	3号墳	蓋	①16.5 ② 4.3	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。かえりは消失し、口縁部は小さく折り返す。	外面天井部ヘラケズリ後ナデ。内面大井部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	暗青灰 ~明灰色	'91表採
39 19 16	KM-48	3号墳	蓋	①16.0 ② 2.5	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。かえりは消失し、口縁部は折り返す。	内面天井部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	淡灰色	'91表採 自然釉
40 19 16	KM-6	3号墳	蓋	①16.0 ② 2.6	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。かえりは消失し、口縁部は小さく折り返す。	外面天井部ヘラケズリ後ナデ。内面大井部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採
41 19 16	KM-59	3号墳	蓋	①15.4※ ② 2.6	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は平直。口縁部は折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。内面大井部不整方向ナデ。ロク左回転。	砂粒を含む。	やや良好	淡灰色	'91表採
42 19 16	KM-51	3号墳	蓋	①15.4 ② 2.9	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。かえりは消失し、口縁部は折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。内面大井部不整方向ナデ。	微砂粒を含む。	やや不良	明灰白色	'91表採
43 19 16	KM-7	3号墳	蓋	①15.0 ② 2.3	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。口縁部は小さく折り返す。	外面天井部ヘラケズリ後ナデ。内面大井部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	明青灰 ~淡灰色	'91表採
44 19 16	KM-50	3号墳	蓋	①16.0 ② 3.2	扁平な円形つみ。天井部は平直。かえりは消失し、口縁部は折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。内面大井部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	灰白色	'91表採
45 19 16	KM-9	3号墳	蓋	①13.6 ② 2.8	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。かえりは消失し、口縁部は折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。内面大井部不整方向ナデ。ロク左回転。	砂粒を含む。	良好	灰白色	'91表採 自然釉
46 19 16	KM-56	3号墳	蓋	①15.1 ② 2.8	擬宝珠系つみ。天井部は平直。口縁部は小さく折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。内面大井部不整方向ナデ。	微砂粒を含む。	良好	暗灰 ~淡褐色	'91表採
47 19 17	KM-8	3号墳	蓋	①16.0 ② 2.3	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は歪む。口縁部は小さく折り返す。	外面大井部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	良好	明青灰色	'91表採
48 19 17	KM-55	3号墳	蓋	①15.3 ② 2.2	扁平な擬宝珠系つみ。天井部は平直。口縁部は小さく折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。内面大井部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	明灰白色	'96調査 自然釉
49 19 17	KM-46	3号墳	蓋		扁平な擬宝珠系つみ。天井部は丸い。口縁部欠損。	外面天井部ヘラケズリ。ロク左回転。	砂粒を含む。	やや不良	灰白色	'91表採

挿表3. 蔵見2・3号墳出土土器観察表(2)

遺物番号 探検隊番号 区画番号	注記番 号	出土位 置	器種	重量 (g)	形 態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
50 19 17	KM3-49	3号墳	蓋	①15.6 ② 2.8	輪状つみみ。 かえりは消失し、口縁端部を 折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。 ロクロ右回転。	礫粒を含む。	良 好	青灰色	'91表採
51 19 17	KM3-58	3号墳	蓋	①14.8 ② 3.6	輪状つみみ。天井部は丸い。 かえりは消失し、口縁端部を 折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。 内面天井部不整方向ナデ。 ロクロ右回転。	礫粒を含む。	良 好	青灰色	'91表採
52 19 17	KM3-47	3号墳	蓋	①17.0 ② 3.7	輪状つみみ。天井部は丸い。 かえりは消失し、口縁端部 を折り返す。	外面天井部ヘラケズリ。 内面天井部不整方向ナデ。	微砂粒を含 む。	良 好	暗青灰色	'91表採
53 19 17	KM3-11	3号墳	蓋	①15.7 ② 2.5	輪状つみみ。 天井部は丸い。 口縁端部は小さく折り返す。	内面天井部不整方向ナデ。	微砂粒を多 く含む。	やや不 良	灰褐色	'91表採
54 19 17	KM3-45	3号墳	坏	①14.2※ ② 5.2 ④ 8.3	高台が外方に踏ん張り、端部 は尖る。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	微砂粒を含 む。	良 好	明灰色	'91表採
55 19 17	KM3-15	3号墳	坏	①13.4 ② 4.8 ④ 9.0	高台は高く外方に踏ん張る。 体部は内湾する。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良 好	青灰色	'91表採
56 19 17	KM3-14	3号墳	坏	①13.7 ② 5.8 ④ 8.4	高台は高く端部は丸い。 体部は内湾する。	内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良 好	暗青灰色	'91表採
57 19 17	KM3-12	3号墳	坏	①13.5 ② 5.3 ④ 8.6	高台は外方に踏ん張り、先端 が尖る。体部はやや直立気味 に立ち上がる。	内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良 好	暗灰 ～灰色	'91表採 自然釉
58 19 17	KM3-20	3号墳	坏	①15.2 ② 4.1 ④10.1	高台は外方に踏ん張る。 口縁部は少し反折する。	外面底部ヘラケズリ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良 好	淡灰色	'91表採 自然釉
59 19 17	KM3-57	3号墳	坏	①16.5 ② 4.1 ④10.5	高台は外方に踏ん張る。 底部は丸く、口縁は大きく外 折する。	外面底部ヘラケズリ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良 好	淡灰色	'91表採
60 19 17	KM3-54	3号墳	坏	①15.0 ② 3.8 ④10.4	高台は直立気味に踏ん張る。 底部は丸い。	外面底部ヘラケズリ。 内面底部不整方向ナデ。 ロクロ右回転。	微砂粒を含 む。	良 好	淡青灰白 ～淡青灰 色	'91表採
61 19 18	KM3-18	3号墳	坏	①15.0 ② 4.2 ④10.2	高台は外方に踏ん張る。 底部は丸い。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	微砂粒を含 む。	良 好	明灰色	'91表採 自然釉
62 19 18	KM3-43	3号墳	坏	①14.7 ② 4.0 ④11.5	低い高台が外方に踏ん張る。 底部は丸く、口縁部は外反す る。	内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	不 良	灰白色	'91表採
63 19 18	KM3-60	3号墳	坏	①14.4 ② 4.2 ④ 9.8	高台は外方に踏ん張る。 底部は丸く、体部との境は緩 をなす。	外面底部ヘラケズリorヘラケズリ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	やや不 良	灰白色	'91表採
64 19 18	KM3-42	3号墳	坏	①13.8 ② 3.6 ④ 9.2	高台は外方に踏ん張る。	外面底部ヘラケズリ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良 好	明青灰色	'91表採
65 19 18	KM3-23	3号墳	坏	①13.8 ② 3.9 ④ 9.1	高台は外方に踏ん張る。	外面底部ヘラケズリ。 内面底部不整方向ナデ。	礫粒を含む。	良 好	淡青灰色	'91表採
66 19 18	KM3-44	3号墳	坏	①13.2 ② 4.3 ④ 8.0	低い高台が外方に踏ん張る。 厚手。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	微砂粒を含 む。	良 好	暗灰 ～明灰色	'91表採
67 19 18	KM3-17	3号墳	坏	①13.0 ② 4.3 ④ 7.8	高台は丸く外方に踏ん張る。 体部はやや内湾する。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	微砂粒を含 む。	良 好	青灰色	'91表採
68 20 18	KM3-22	3号墳	坏	①13.0 ② 4.3 ④ 8.2	高台は外方に踏ん張る。	外面底部ヘラケズリ。 ロクロ右回転。	微砂粒を含 む。	良 好	青灰 ～明灰色	'91表採
69 20 18	KM3-19	3号墳	坏	①12.9 ② 4.1 ④ 8.2	高台は低く外方に踏ん張る。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。	微砂粒を含 む。	良 好	青灰色	'91表採 自然釉
70 20 18	KM3-21	3号墳	坏	①12.8 ② 4.1 ④ 7.9	高台は低く外方に踏ん張る。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。	微砂粒を少 し含む。	良 好	青灰色	'91表採 自然釉

挿表4. 蔵見2・3号墳出土土器観察表(3)

遺物番号 発掘番号 図記番号	注記番 号	出土位 置	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土	焼成 色調	備 考	
71 20 18	KM3-13	3号墳	坏	①12.6 ②3.8 ③9.0	高台は高く外方に跳ん張る。 底部は丸い。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採
72 20 18	KM3-16	3号墳	坏	①12.0 ②3.8 ③8.9	高台は外方に跳ん張る。	外面底部ヘラケズリ後ナデ。 内面底部不整方向ナデ。	砂粒を含む。	良好	灰白色	'91表採
73 20 19	KM3-24	3号墳	高坏	①9.8 ②7.3 ③7.7	小型の無蓋高坏。 胴部には透しがない。	ヨコナデ。	微砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
74 20 19	KM3-40	3号墳	小型 長頸壺	①4.8※ ②7.6 ③5.0	装飾無蓋の小型長頸壺。 口縁は外反する。	ヨコナデ。 接合部ユビオサエ。	砂粒を多く 含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
75 20 19	KM3-41	3号墳	小型 長頸壺	①5.8※ ②8.2 ③4.8	装飾無蓋の小型長頸壺。 口縁は外反する。	ヨコナデ。 接合部ユビオサエ。	砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
76 20 19	KM3-37	3号墳	小型壺	①6.4 ②7.2 ③5.5	装飾無蓋の小型壺。 複合口縁。 胴部中央に穿孔。	ヨコナデ。 接合部ユビオサエ。	微砂粒を多 く含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
77 20 19	KM3-38	3号墳	小型壺	①5.9 ②7.0 ③5.2	装飾無蓋の小型壺。 複合口縁。 胴部中央に穿孔。	ヨコナデ。 接合部ユビオサエ。	微砂粒を多 く含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
78 20 19	KM3-39	3号墳	小型壺	①5.6 ②7.0 ③4.9	装飾無蓋の小型壺。 複合口縁。 胴部中央に穿孔。	ヨコナデ。 接合部ユビオサエ。	砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
79 20 19	KM3-35	3号墳	小型坏	①4.1 ②1.1	装飾無蓋の小型坏。	ヨコナデ。	微砂粒を含む。	良好	灰白色	'91表採 自然胎
80 20 19	KM3-26	3号墳	平瓶	①7.8※ ②14.0	口縁は内湾する。 体部は算盤玉状で縁をもつ。	外面体部下半ヘラケズリ。	微砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
81 20 19	KM3-27	3号墳	平瓶	①13.4※ ②17.8 ③26.2	口縁部外面に縁をもつ。 胴部に縁をもち、体部上面に 2筋の内湾浮文。	外面底部ヘラケズリ。 胴部ヘラケズリ後ナデ。	砂粒を多く 含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
82 20 19	KM3-34	3号墳	長頸壺	①14.9 ②28.3 ③21.1	口縁部は大きく外反する。 頸部に2条の沈線。体部は屈 曲状で、中心に沈線と刻文。 底部は丸い。	外面体部下半～底部に不整方向ヘ ラケズリ。	砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
83 20 19	KM3-25	3号墳	長頸壺	①10.4 ②24.8 ③10.6	口縁は外反する。頸部に1条 の沈線。体部は算盤玉状で、 胴部には沈線と刻文。高台 は外方に跳ん張る。	外面体部下半～底部はヘラケズリ 後ヨコナデ。	微砂粒を含 む。	良好	明青灰色	'91表採 自然胎
84 21 20	KM3-36	3号墳	鳥形瓶	①12.4 ②24.5※ ③13.2	体部は円筒状で、背部が少し 平凸。腹部の刻表現。胴部 には段をもつ。	体部ナデ。 胴部・口縁部ヨコナデ。	砂粒を含む。	良好	明灰色	'91表採 自然胎
86 23 21・22	KM3-61	3号墳	陶拍	⑤185.0 ⑥30.0 ⑦84.0	四方形の部に略尾を穿せる。 胴部には幅広の突帯を貼り付 き、帯は2行8列。 帯・身2分彫。	柄身・胴部外面ハケメ。 裾部内外湾、柄身・胴部内面ナデ。	砂粒を含む。	良好	灰白～ 淡黄灰色	'91表採 須志質
87 24 23	KM2-23	2号墳	鍋	①29.8※	口縁部は屈曲して、上方に立 ち上がる。	内外面胴部ハケメ。	微砂を含む。	良好	灰 ～暗灰色	'91表採 瓦質
88 24 23	KM2-24	2号墳	鍋	①26.6※	「く」の字状口縁。	内外面胴部下半ハケメ。 外面胴部上半ナデ、内面ユビオサ エ。	砂粒・雲母 を含む。	良好	暗茶褐色	'91表採 外面ス 付着・土 師質
89 24 23	KM2-21	2号墳	鍋	①30.4※	口縁部は屈曲して、上方に立 ち上がる。外面は物頭片彫が 段状に残る。	外面胴部ユビオサエ。 内面胴部ナデ。	微砂・雲母 を含む。	不良	淡黄灰色	'91表採 2次焼成
90 24 23	KM3-53	3号墳	羽釜	①23.4※	体部は円筒、胴部は斜上方 に突出する。	外面ナデ。 内面ユビオサエ、ナデ。	微砂粒を含む。	やや不 良	灰白 ～暗灰色	'91表採 瓦質

挿表5. 蔵見2・3号墳出土土器観察表(4)

遺物番号 神宮番号 図版番号	注記番号	出土位置	種類	法量	特徴	備考
25 17 23	KM2-107	2号墳石室	直刀	残存長 38.5cm 刀身長 34.5cm 刀身幅 2.7cm 青銅 0.6cm	鉄製。切先から8cmくらいまでが、両方の剣状の短刀。刀身は平造。両部は斜角に切れ込む片開。基部には目釘穴は認められない。両部に青銅製輪状装具。基部を欠損し、全体に錆化が著しい。	'96調査
26 17 23	KM2-101	2号墳石室	刀子	残存長 4.2cm 基部幅 1.0cm 青銅 0.5cm	鉄製。刀身基部から両側の両部。刀身は研減りが顕著。基部には木釘が残存する。 28と同個体。	'91表採
27 17 23	KM2-103	2号墳石室	刀子	残存長 5.7cm 青銅 0.4cm	鉄製。刀身先端部で、切先は丸くなっている。	'96調査
28 17 23	KM2-102	2号墳石室	刀子	残存長 6.4cm 基部幅 1.0cm 茎背幅 0.4cm	鉄製。基部で柄の木質が残存している。	'96調査
29 17 23	KM2-104	2号墳石室	鉄鎌	残存長 4.8cm 頭部幅 0.9cm 頭部厚 0.3cm	鉄製。長頸鎌鎌身頭部。断面片丸造りと思われる。	'96調査
30 17 23	KM2-105	2号墳石室	鉄鎌	残存長 4.7cm 莖波幅 0.7cm 莖波厚 0.3cm	鉄製。長頸鎌の莖波部。断面長方形。	'96調査
31 17 23	KM2-106	2号墳石室	鉄鎌	残存長 8.6cm 莖波幅 0.6cm 基部長 3.6cm	鉄製。いわゆ社長頸鎌の間から基部。両部は無角。	'96調査
85 22 23	KM3-101	3号墳石室	鐙	長径 3.8cm 短径 2.2cm 幅 0.45cm	青銅製。平面楕円形の鍍出鐙。柄に接する面と鞍に接する面は平坦。外面は丸味を持つ。	'91表採

挿表6 蔵見2・3号墳出土金属製品観察表

第VI章 蔵見古墳群発掘調査の成果

蔵見2・3号墳は、比較的小規模ながら特徴のある墳丘を有する後期古墳であった。築造にあたっての前後関係は、2号墳の周溝を切り込んで3号墳の周溝が掘り込まれており、2号墳が先行して築造されたことが明らかで、出土須恵器から7世紀代に造営されたと推定される。また、両古墳が立地する墳丘背後の自然傾斜面は、大規模に削平された地山整形が行われており、2号墳が西側端部に立地していることから、2号墳の築造時には後に3号墳を築造する計画があったものと考えられ、両古墳は計画的に造営されたと推定される。

蔵見2号墳

墳丘は、石室側壁より上面の封土が流失していたことから、もとの高さを推定することはできなかったが、遺存していた墳裾部から復元すると一辺が約10.0mの方形を呈する方墳と推定され、前方向へ緩やかに傾斜して立地していることが確認された。また、東墳裾部には石材を3段に積み重ね、外面を内傾させて石垣状に露呈させた外護列石が検出された。

外護列石の構築されている範囲は、石室奥壁の延長上の墳裾部を起点として墳丘前面に至る間に構築されており、奥壁背面の墳裾部には構築されていないことから、墳丘背面での墳丘の流失防止は考慮されていないことになる。しかし、墳丘の流失を防ぐ目的から視点を変え、人の目に触れる墳丘の外観を意識して体裁が優先すれば、前方部からの視野の範囲に列石が構築されていれば目的を達成していることになる。従って墳丘背面の外護列石は、構築を必要としないことになり、築造過程で簡略化されたものと考えられる。

石室は、無袖型の横穴式石室で石室を構成する石材は、奥壁部の天井石1石と玄室部の奥壁、側壁が原位置を保っており他の天井石と羨道部から前庭部に至る石材は、前庭部側の前壁とともに南の丘陵下に転落し、墳丘の規模等は推測することは不可能であった。しかし、遺存する玄室の奥壁と側壁からは、石材の据付けと盛土を交互に繰返し、下段石材から丁寧に3段の石積みを繰り返す工程が窺えた。

側壁の石材は、平らに近い節理面を石室の内面に向けて据えられており、多くの整痕が認められた。この整痕による整形痕は、極端な凸部を剝離したものと推定され、数条の水平打撃が認められるものの、大半は下方へ打ち降ろす打撃痕であった。石室内の床面にはこの剝片が認められたことから、据付け後に整痕による整形を行ったものと思われ、いわゆる切石造りの石室を意識しているものと考えられる。

石室内の遺物は、流入土が厚く堆積した玄門部付近と奥壁部の隅で検出されており、堆積の薄い玄室中央部付近からは、数点の陶棺片が検出され、堆積の厚い玄門部付近では須恵器杯類10点と長頸壺1点、上師器の壺1点が検出された。また、奥壁部付近では、鉄刀1点、鉄鎌3点が検出された。これらの出土遺物は、埋葬時に供献された原位置を保つものと考えられ、石室の東寄りで検出された須恵器杯の一群と西寄りで検出された蓋坏等の一群を比較すると後群はより古相を示している。

表面採取された陶棺は、第2次埋葬時に玄室外に搬出された可能性もあり、安置されていた位置、埋葬時期等は確認できなかった。

これらの出土遺物の中で蔵見2号墳の造営時期を示すものとしては、坏身口縁に立ち上がり有する須恵器杯(1~5)が、形式的に最も古い様相を持っている。この坏蓋は口径11.5~12.0cmを測り、天井部及び底部外面のヘラケズリ調整を省略するもので、岩美町小畑8号墳出土須恵器等に類似し、阿町山ノ神古墳群

Ⅲ期、高野坂古墳群のⅡ期に該当しよう(山内1980、中野他1991、中野他1992)。これを大阪府陶巴古窯址群や奈良県飛鳥・藤原地域の須恵器編年と比較すると、口径が最も小型化する時期の直前段階と捉えられ、陶巴編年Ⅱ型式5段階、飛鳥Ⅱの時期(中村1980、西1978)と考えられる。これにより、蔵見2号墳の築造時期は、7世紀第2四半期に遡ると推定される。

これに続いて蓋の口縁にかえりを有し、再び口径が大型化した坏がみられ、蓋(9)には底部外面をロクロを使用しないでヘラケズリする坏(13)がセットになり、飛鳥Ⅱの時期に並行するものと思われる。さらに、高台を有する坏には、かえりが消失して端部を折り返す蓋が伴って玄室右側で一括出土しており、これらは飛鳥Ⅴ期に降るものと考えられ、7世紀末～8世紀初頭まで追葬がなされたことが想定される。

蔵見3号墳

墳丘の遺存状態は、2号墳同様側壁より上面の封上が流失していたことから、墳丘の高さを推定することはできなかったが、遺存していた墳裾部から東西約11.5m、南北約10.0mの前方側が拡張した「多角形(変形八角形)」の平面形態を呈し、南方向に傾斜して立地していることが確認された。また、東墳裾部には石材を内傾させ、石垣状に積み重ねた外護列石が検出された。外護列石の構築されている範囲は、奥壁を延長した墳裾部を起点として前庭部に至る間に構築されており、北側の奥壁背面の墳裾部には構築されていなかった。この墳丘背面上に外護列石を配さない方法は、前述の2号墳と同様の目的があるものと推定され、特に前庭部側が肥大した3号墳の場合は誇張した墳丘が指向されたものと思われる。

墳形は、八角形の左上辺部と下辺部が極端に長く、横辺部と下斜辺部が極端に短く、平面的には「電気石」(TOURMALINE)結晶端面の稜角を切り取ったような特異な多角形を呈している。

八角形墳の存在は古くから知られており、「舒明天皇陵、天智天皇陵、天武・持統天皇合葬陵、文武天皇陵」が著名な古墳で、7世紀～8世紀初頭の大王(天皇)陵に採用されている墳丘形式と考えられていた。しかし、近年の発掘調査の成果として、平面八角形又六角形の墳丘を呈する特異な終末期古墳の事例が各地で報告され、大王陵とは異なる地方の多角形墳としてその存在が注目されている。

寺社下博によれば、天皇陵を除く18例が報告されており、中国、近畿、北陸、関東の広範囲にわたる多角形墳の存在が紹介されている(寺社下1997)。これによると、本村の南に隣接し彩色壁画で著名な国府町の「梶山古墳」(津川1994)、蔵見古墳群の南西約20km所在する郡家町の「福本70号墳」が最もよく類似した墳丘形態を示している。その特徴に『南辺が広くて北辺が狭まる将棋の駒の稜角を切り取ったような変形八角形を呈している』ことなど、蔵見3号墳と多くの類似点を持っている。この3基の古墳は、埋葬形態、副葬品などの差異は認められるが、梶山古墳・福本70号墳ともに旧因幡国でも千代川より東の旧八上郡・法美郡に位置していることから、特異な多角形墳の形態は強い地域性を示していると思われる。

石室は、右片袖型の横穴式石室で石室を構成する石材は、奥壁部の天井石1石と玄室部の奥壁、側壁が遺存しており、他の天井石と羨道部から前庭部に至る石材は、前庭部側の崩壊とともに南の丘陵下に転落していた。遺存する玄室の奥壁と側壁からは、2号墳同様に石材の据付けと盛上を交互に繰返し、下段石材から丁寧に3段の石積みを経り返す工法が窺えた。

側壁の石材は、平らに近い節理面を石室の内面に向けて据えられており、多くの撃痕が認められた。2号墳と同様に切石の石室を意識しているものと考えられる。

石室内の遺物は、大半の流入物が除去されて農作業倉庫に転用していたため、原位置を保って検出された

のは奥壁の左隅で坏蓋1点のみであったが、前述の表面採取で陶棺をはじめ、鳥形瓶等多く遺物が玄門部から前庭部周辺で採取されている。

これらの出土遺物の中では、擬宝珠形つまみを有する蓋の口縁にかえりを有し、再び口径が大型化した蓋(33)が最も古相を示し、さらに口縁内面のかえりが断面三角形の痕跡的なものとなって口径が17.0cmと大型化する蓋(35)等が飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期に並行するものと思われる。これにより、蔵見3号墳の築造時期は7世紀第3四半期と推定される。

これに続いて、高台付坏とセットとなるかえりが消失した蓋には、扁平な擬宝珠系つまみがつくものと輪状つまみが付くものがあり、これらは八頭郡郡家町私都窯跡群の山田4号窯及び下坂窯跡群出土須恵器に類似している(中野1988)。また、畿内における須恵器編年と比較すると飛鳥Ⅴ期に降ると考えられ、2号墳同様7世紀末～8世紀初頭まで追葬がなされたことが想定される。

〈引用・参考文献〉

- 寺社下 博1997『地方の多角形墳』『生産の考古学』倉田芳郎先生古稀記念会
津川ひとみ1994『史跡嵯山古墳発掘調査報告書』国府町教育委員会
中村 浩1980『陶邑Ⅲ』大阪文化財センター
中野 知照1988『下坂窯跡群』郡家町教育委員会
中野知照他1991『山ノ神古墳群発掘調査報告書』岩美町教育委員会
中野知照他1992『高野坂古墳群発掘調査報告書』岩美町教育委員会
西 弘海1978『土器の時期区分と形式変化』『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
山内 紀嗣1980『小畑古墳群第8号墳発掘調査報告書』岩美町教育委員会

第Ⅶ章 付 論

蔵見の陶棺について

倉敷考古館館長 間 壁 忠 彦

因幡国、鳥取県岩美郡福部村蔵見古墳群3号の陶棺は、屋根形蓋の上面両端へ鳥尾を飾っている。現在までに全形が復元できた全国唯一の鳥尾付陶棺である。

多数の円筒を脚として、その上に棺身を作り付け、蓋をのせた焼き物の棺を陶棺と呼び、古墳後期から終末期に用いられている。この棺形態は、古墳がある全国どこでも行なわれたものではなく、出土する地域には限りがある。しかし、分布地域全体を日本の地図でみると結構広範囲となり、中・四国地方から福島県にまで及び、北部九州にもその可能性を持つ断片がある。焼き物であるため破損しやすく、完全な姿で眼にできる例が多いとはいえないが、断片となっても不朽の材質であり、存在を認識しやすい。全国で700~800例が知られ、分布範囲が広いといっても、突如として一棺のみが発見されたような例を含めた分布であり、全数の75%以上が岡山県出土である。陶棺分布の中心は岡山県だといえる。岡山に次いで陶棺が多いのは畿内地域である。大和・河内・和泉・摂津・山城でそれぞれ小範囲ながら出土が集中する地域が知られ、ほかに点的にも発見例がある。これらは、岡山県の例に較べると決して多いとは言えないが、陶棺の中では見逃せないものである。それは、畿内の陶棺が岡山の陶棺の大部分と比較して、形態上で差異を示すことによる。一般に、陶棺には、上師質と須恵質の両者があるが、どちらの場合も畿内と岡山との間に形態差が明確に認められる。それを岡山型と畿内型に区分して考える。岡山型は、主として岡山県を中心にした区分がみられ、畿内型は、数の上では少くとも畿内を中心に全国的な分布を示す。岡山以外の地方で出土する陶棺は、畿内の影響下で製作、使用された事例が多いということである。

そのような中で、蔵見古墳群3号の陶棺がどのようなものであるかに目をむけよう。まず、焼成は須恵質である。須恵質陶棺は、岡山型も畿内型も蓋を家形屋根に作ることが多い。それらを共に須恵質家形陶棺と呼んでいるが、家形の形態に二種があり、四注屋根と切妻屋根に分れる。四注屋根は、仏堂や宮廷・官衙などの建物由来し、切妻屋根は官の倉庫などを模したと思われる。畿内型では四注屋根が原則であり、岡山型では切妻屋根が多く、四注屋根も少し知られる。屋根形の差異以外にも須恵質家形陶棺の畿内型と岡山型では違いがある。その主な点を列挙すると、岡山型は、器壁が厚い・身と蓋を前後に二分して作る・身と蓋の合せ方は身の上端と蓋の下端となった平坦面で合す・外面に低く幅広い突帯をつけることがある。畿内型は、器壁が薄い・身蓋共に一体に作る・身の上端に受部を作ってそれに蓋の下端をのせる・外面に突帯をつけない（無帯）などが指摘できる。

須恵質である蔵見3号墳陶棺では、器壁が厚く、身と蓋は平坦面で合わさる。身と蓋を中心で前後二分して作り、身と蓋が合する部分と二分した前後が合う部分の外面に低いながら幅広い突帯がついている。こうした特徴は、岡山型の須恵質陶棺に合致するのである。蓋の形状も四隅に少し丸味を持っているが、四注屋根だといってよいだろう。しかし、陶棺の形状として、この須恵質陶棺を、典型的な家形陶棺と呼ぶのには少し問題が残る。それは家形屋根の軒先部分の構造である。

蔵見3号墳陶棺は、屋根形の軒先の端に当る部分が直接に身と合わさっていて、軒先は少しも外部へ延びていない。それに対して、家形陶棺と呼ばれるものは、原則として軒先の下に身と合わさる部分を作り出しているのである。そのために、わずかではあるが、身の先端よりも外方へ軒先部分となった蓋の先端部分が出張った形をなしている。その点は、身と蓋の合せ方に違いがみられた岡山型の場合も畿内型の場合も同様である。岡山県には、ほかに土師質の切妻家形陶棺があるが、この場合にも軒先は他の家形陶棺と同様である。

蓋の下端が蔵見3号のような形態になるのは、家形陶棺ではなく亀甲形陶棺なのである。家形陶棺の主流が須恵質であったのに対し、棺の外面に突帯文様があって、それが亀甲状にみえることに由来する亀甲形陶棺は土師質であることが多い。土師質亀甲形陶棺は、畿内型も岡山型も身蓋共前後二分作りするが、身と蓋の合せ方は、須恵質家形の場合と大体同様の形態差がみられる。岡山型は器壁が厚く、畿内型は薄い点も同じ傾向といえる。外面の突帯が畿内型では幅狭くて高く、岡山型では幅広く低いのを原則とする。畿内には須恵質陶棺にも亀甲形のものがあり、この場合は、身・蓋の合せ方や突帯を畿内型土師質亀甲形陶棺から受け継いだ形態である。これは、須恵質亀甲形陶棺の畿内型といわれる。岡山にも須恵質亀甲形陶棺が少数ながらあり、それらのうちには、畿内型と岡山型の二者が含まれる。陶棺の終末期に岡山へも畿内の影響があり、同じ時期に土師質亀甲形陶棺、岡山型の系譜を受け継いだ須恵質亀甲形のものもあったということである。須恵質亀甲形の場合も、岡山型は身・蓋共前後二分作り、畿内型は一体作りである点は、須恵質家形陶棺と同様である。須恵質の場合家形であれ、亀甲形であれ、岡山型と畿内型とに大別できる形態差は二分作り対一体作り・身蓋の合せ方・器壁の厚さだといえる。

少し煩雑な説明となったが、蔵見3号墳陶棺が、亀甲形の要素も持ちながら、四注屋根家形と呼ぶべき須恵質陶棺で、岡山型の系譜の中へ入れるべきものであろうという点を見てきたのである。蔵見3号墳に接した2号墳の陶棺も断片ながら基本的には同じ形態の須恵質陶棺である。山陰地方には、但馬、因幡、伯耆、出雲で数こそ多くないが陶棺の出土が知られている。それらのうちで形態が点検できる例は、畿内型もしくは畿内型の影響下で製作されたとみられるのが普通のものである。ところが蔵見古墳群では、岡山型であった。因幡国は岡山県で最も陶棺の出土密度が高い美作国に接しているとはいえ、山陰の陶棺としては特異な位置を占めるのが蔵見の陶棺ということになる。

鷓尾付陶棺として全体形が見えるのは、蔵見3号墳が唯一であるが、他にもその可能性を持つものが知られている²²。蓋の両端上に残る剝離痕跡から鷓尾付であったかと推定された岡山県倉敷市玉島長尾上上の小形陶棺があり、岡山県真庭郡久世町五反谷古墳出土とされる小形鷓尾一對とか、須恵器窯址で陶棺も焼成した岡山県邑久郡牛窓町寒風窯址群採集の小形鷓尾のように陶棺へ付着していたかと推察できる例もある。これらは、鷓尾か陶棺本体かのいずれか一方のみが残った例からの推測であるが、東京国立博物館所蔵の岡山県勝田郡勝央町大字平、字五反谷の横穴式石室から出土したという鷓尾の場合は、少しは具体像にせまることができる。

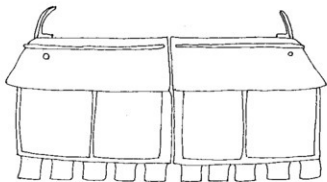
勝央町五反谷の鷓尾は、古くから学界で明示されてきた資料で、東京



挿図25. 勝央町五反谷古墳の鷓尾

《藤沢一夫「古墳と墓誌」『日本考古学講座（歴史時代）』による）
左：高さ19cm。

国立博物館へは1910年に坏4、埴3、平瓶2、陶栓1と共に収蔵、同時出土の陶棺は地元に残されたという。陶棺自体は、その後に行方不明であるが、幸運にもそれと推定できる陶棺の写真図版が残っている。その図版で見ると、須恵質であったかと推定でき、形態は亀甲形陶棺の要素を残しながら、四注家形陶棺の部類へ入れるべきものである。蔵見の例とは、若干差異もあるが類似している点も多い。伴出の須恵器が示す年代は蔵見も五反途も共に古墳の最終末期としてよからう。また、東京国立博物館に残る陶栓1点は、小形のもので、写真図版にみえる五反途陶棺の蓋の孔とよく対応しそうな大きさといえる。五反途と蔵見の鵞尾付陶棺は、それぞれ個性を持ちながら相互に無関係とは思えないほどの類縁性を考えさせるのである。



挿図26. 勝央町五反途陶棺推定復元図

和田千吉『日本遺跡遺物図譜』の写真図版と東京国立博物館蔵鳥尾からの五反途陶棺推定復元図。

は思えないほどの類縁性を考えさせるのである。

仏教的要素が古墳の棺に強くあらわれた鵞尾付陶棺の類例にふれたが、仏教的要素では、蔵見古墳群陶棺については、見過ごしてしまえないことがある。明治時代に蔵見古墳群中で採集したという陶棺片に蓮花文がみられたという記録である。その資料の行方は不明のようであるから、現在点検することはできないが、岡山県邑久郡長船町本坊山例（東京国立博物館）、同真庭郡落合町下一色2号墳例（落合町教育委員会）のような蓮花文浮彫りある陶棺例に通じるものであった可能性もあることにならう。だとすれば、蔵見古墳群の仏教的要素は、さらに強かったことになるのである。

註1 間壁茂子「岡山の陶棺」『岡山の歴史と文化』1983。福武書店『吉備古代史の基礎的研究』1992。学生社所収

註2 間壁忠彦・間壁茂子「鵞尾付と推定される小陶棺」『倉敷の歴史（倉敷市史研究紀要）』5。1995。

註3 後藤守一『日本考古学』1927。四海書房、藤沢一夫「墳墓と墓誌」『日本考古学講座（歴史時代・古代）』1956。河出書房

註4 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿—資料篇（I）—」『東京国立博物館紀要』16。1980。この資料に興味を示された本村豪章氏は1973年末から翌年初めにかけて、五反途1000番地の横穴式石室を調査されたが、須恵質切妻家形陶棺—基部分が断片となって出土した程度で、鵞尾との関係は明確にならなかったようである。その陶棺は広島大学文学部考古学研究室に保管されている。

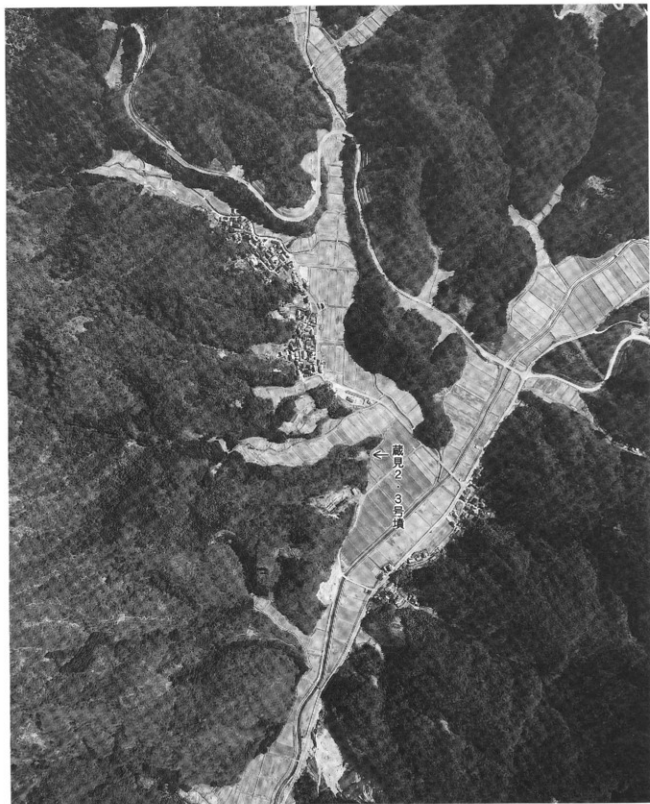
註5 和田千吉『日本遺跡遺物図譜（第5輯）』1916

註6 伊藤源作「鳥取市附近古墳」『地理と歴史』1—4。1900。で「……備前邑久郡より出でたる陶棺（博物館陳列）にみる、菊形の紋形おぼろげに存せる部分を得たり。」と記され、文中の博物館は現在の東京国立博物館、邑久郡より出でたる陶棺は岡山県長船町本坊山の蓮花文ある陶棺のことであり、この文は和田千吉「陶棺埋没の研究」考古界1—4。1901に引用されている。またこのことは、斎藤和夫・森浩一「古代学研究」1949以来、陶棺地名表に記されることが多い。

報 告 書 抄 録

ふりがな	くらみこふんぐんはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	蔵見古墳群発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福部村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	谷岡陽一・中原齊							
編集機関	福部村教育委員会							
所在地	〒689-01 鳥取県岩美郡福部村大字細川668							
発行年月日	西暦 1997年3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
蔵見2・3号墳	鳥取県岩美郡福部村 大字南田字古宮236・ 237・30・30-3・31	31033	13・14	35度 31分 39秒	134度 31分 39秒	19960617～ 19970210	500	崩壊調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
蔵見2号墳	古墳	7世紀中葉	方形墳 横穴式石室 外護列石	陶棺 坏蓋 坏身 長頸壺 鉄刀 刀子 鉄鎌				
蔵見3号墳	古墳	7世紀末	多角形墳 横穴式石室 外護列石	陶棺(鷓尾付) 坏蓋 坏身 高杯 長頸壺 平瓶 鳥形瓶 裝飾須恵器の子坏 裝飾須恵器の小壺(尊) 裝飾須恵器の小壺(長頸壺) 青銅製鐙				

圖 版 編



蔵見古墳群周辺の空中写真



① 蔵見2・3号墳遠景（南西より）



② 調査前の蔵見2・3号墳（前方2号墳・後方3号墳）



① 蔵見2・3号墳（西より）



② 蔵見2・3号墳（東より）



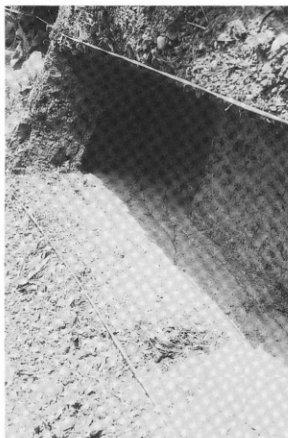
③ 前庭部が崩壊した蔵見2号墳（前西より）



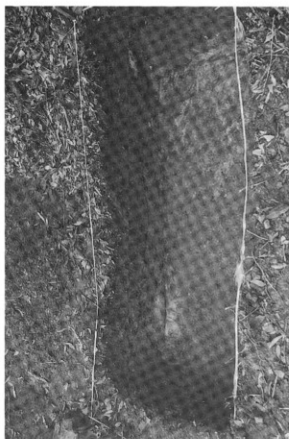
④ 墳丘背後の地山笠形面（西より）



① 調査前の全景



② 第1トレンチで検出された掘り方(南西より)



③ 第2トレンチで検出された周溝と土層堆積状況(東より)



④ 玄室東側壁の裏込め状況(南より)



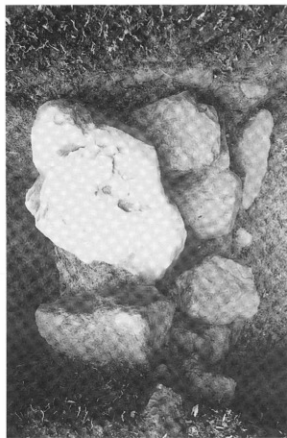
② 第3トレンチで検出された東外護列石 (東より)



④ 第3トレンチで検出された東外護列石 (南より)



① 第3トレンチで検出された東外護列石 (東より)



③ 第3トレンチで検出された東外護列石 (東より)



② 玄室内玄門部 (北より)



④ 玄室内遺物鉄刀出土状況 (南より)



① 玄室内奥壁部 (南より)



③ 玄室内遺物出土状況 (北より)



① 調査前の全景 (南より)



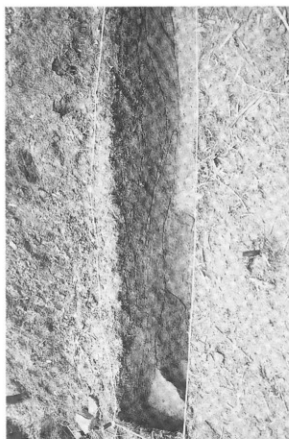
② 調査後の全景 (南より)



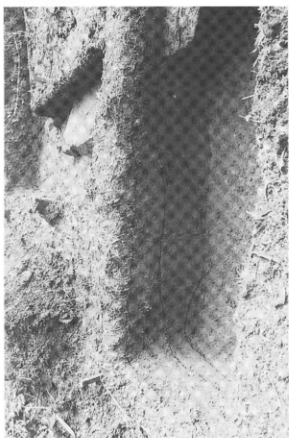
③ 2号墳西面横断面後出状況(南より)



④ 第3トレンチで検出された掘り方 (南より)



① 第4トレンチで検出された間溝と土層堆積状況 (東より)



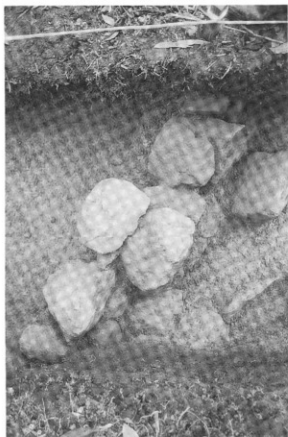
② 第5トレンチで検出された間溝と土層堆積状況 (北より)



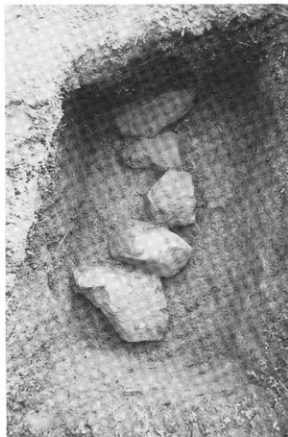
③ 第8トレンチで検出された間溝と間溝屈折部の列石 (東より)



④ 玄室西側壁の墓込め状況 (西より)



② 第3トレンチで検出された西外護列石(上・東)



④ 第9トレンチで検出された西外護列石(上・東)



① 第3トレンチで検出された西外護列石(西より)



③ 第3トレンチで検出された外護列石(左3号墳・右2号墳)(北より)



① 東外護列石全景（南東より）



② 石室全景と東外護列石（南より）

(3号墳)

② 東外圍列石検出状況(東より)



④ 東外圍列石検出状況(東西より)



③ 東外圍列石検出状況(南東より)



① 東外圍列石検出状況(北より)





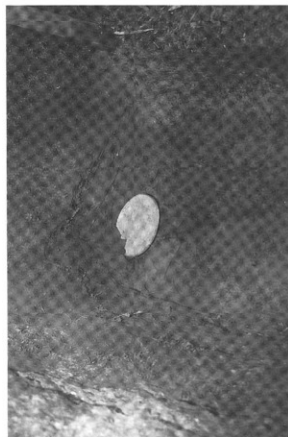
② 西側壁内部 (東より)



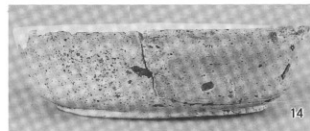
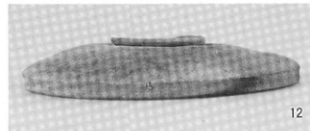
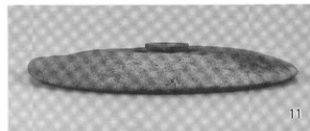
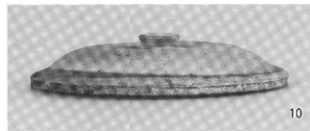
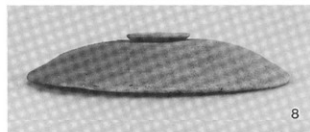
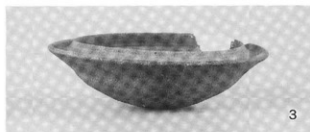
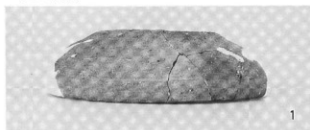
④ 前庭部に散布していた陶器片

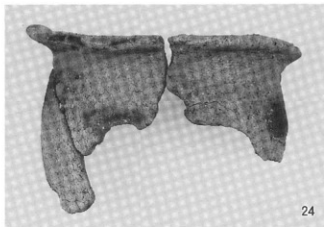
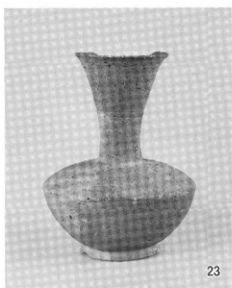
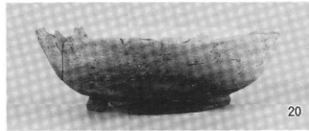
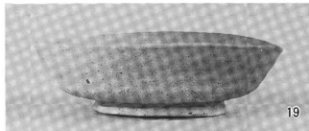
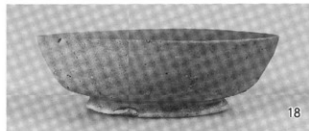
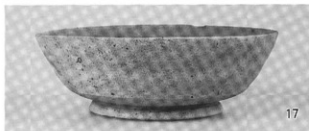
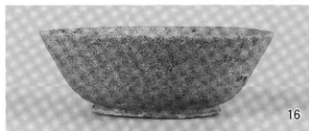
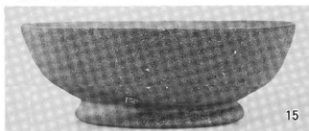


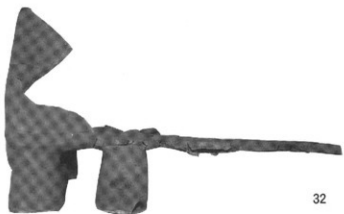
① 石室内部 (南より)



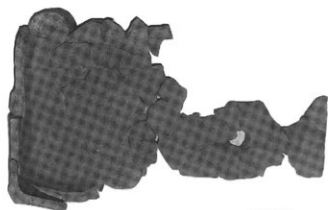
③ 石室内遺物出土状況 (南より)







32



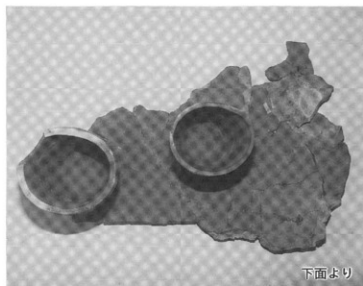
上面より



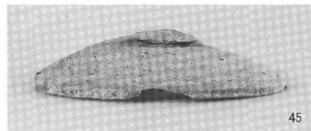
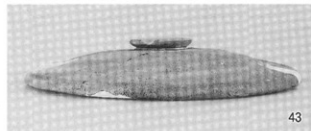
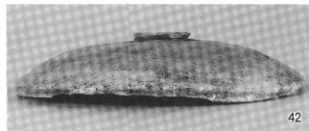
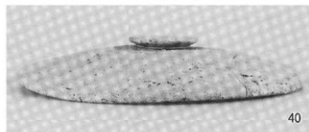
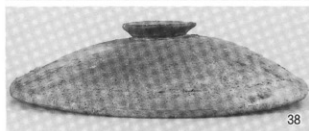
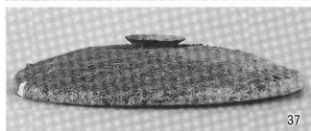
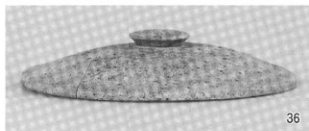
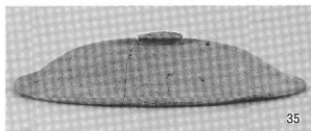
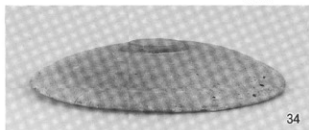
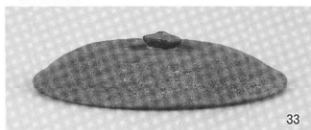
B側面片

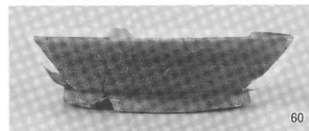
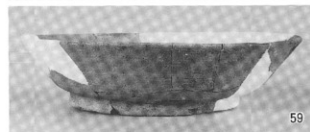
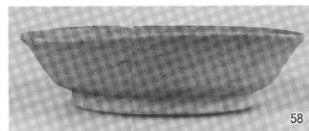
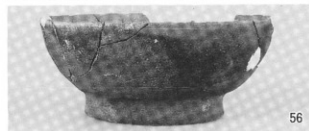
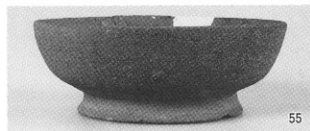
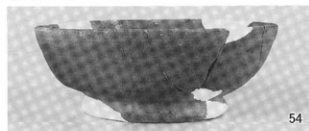
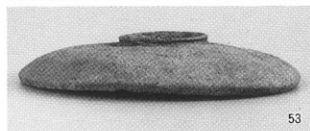
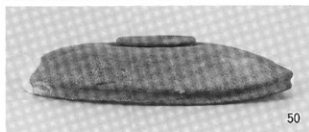
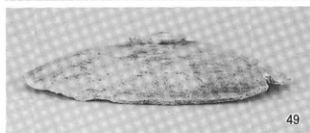
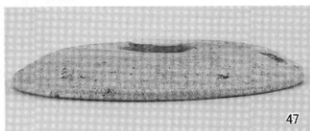


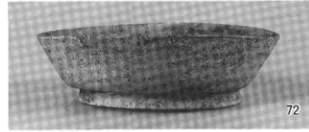
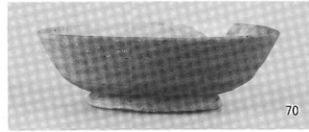
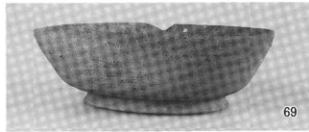
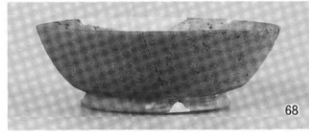
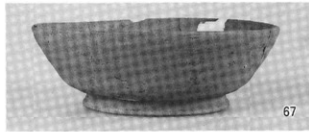
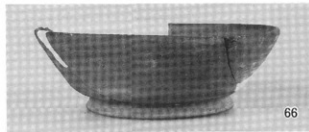
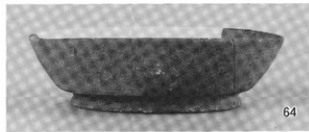
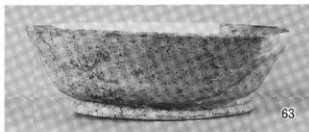
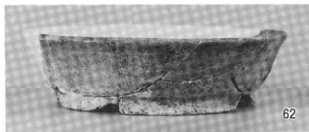
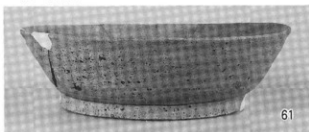
脚部に残る指頭痕

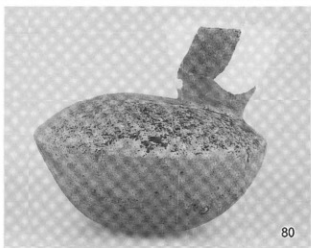
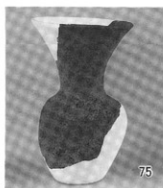
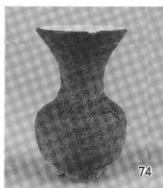


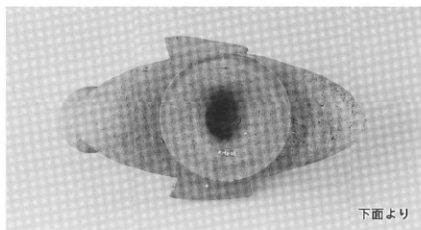
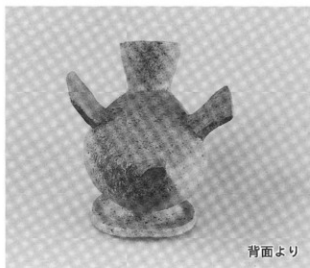
下面より

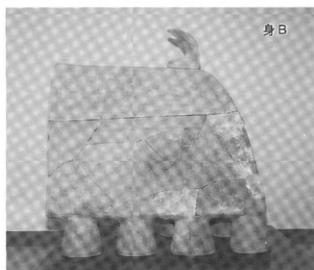
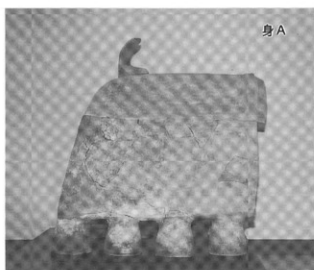
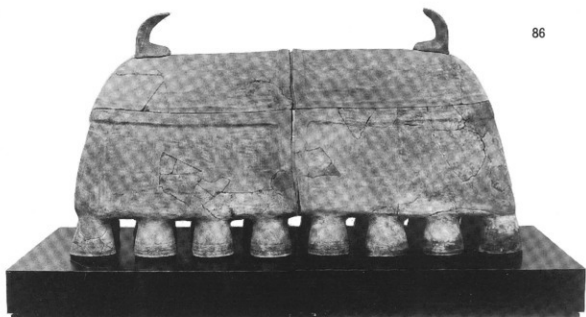


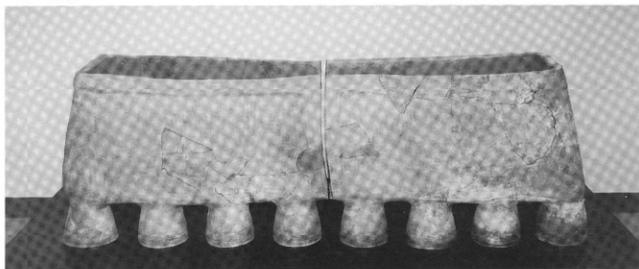




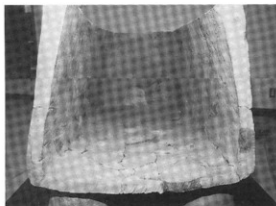




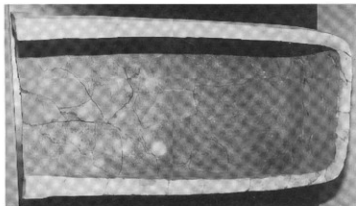




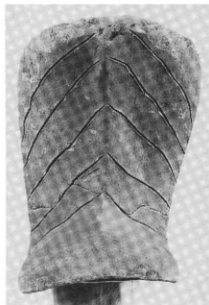
蓋を外した陶棺



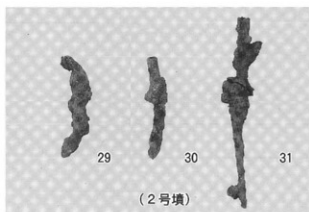
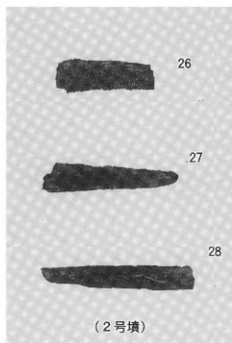
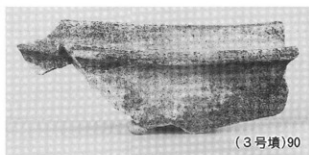
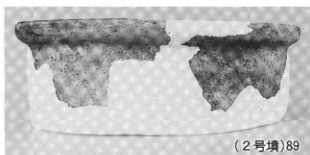
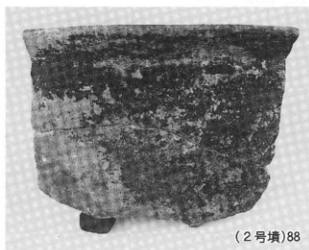
身Bの工具静止痕



身A底面の円形斑



鰭尾



福部村埋蔵文化財調査報告書 第11集

蔵見古墳群発掘調査報告書

平成9年3月発行

編集 福部村教育委員会

発行 〒689-01 鳥取県岩美郡福部村細川668
TEL (0857) 75-2114

印刷 綜合印刷出版株式会社

〒680 鳥取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23-0031
